経済経営研究
Vol. 40 No. 1 2019年4月
日本政策投資銀行設備投資研究所

貨幣・雇用・リベラリズム
大瀧雅之氏の研究を振り返って*
—東大社研・DBJ設研シンポジウム抄録—

加 藤 晋
（東京大学社会科学研究所）
内 山 勝 久
（日本政策投資銀行設備投資研究所）
［編］

---

* シンポジウムにご登壇いただき，その記録を『経済経営研究』として刊行することをお許しいただいた皆様に心より感謝申し上げたい。本誌をまとめるにあたっては，シンポジウムの内容を忠実に反映するよう万全の注意を払って原稿を作成し，登壇者の方にも可能な限りご確認をいただいたが，残された誤りについてはすべて編者たちの責めに帰するものである。本誌に掲載された講演・討論の内容や参照資料は，すべてシンポジウム開催時点（2018年9月6日）までの情報に基づく各登壇者の個人的見解であり，各人が所属する組織の公式見解を示すものではない。なお，各登壇者の所属・役職はシンポジウム開催時点のものである。

Money, Employment and Liberalism

A Review of the Works of Professor Masayuki Otaki

Proceedings of the ISS and RICF Joint Symposium

Economics Today, Vol. 40, No. 1, April 2019

Edited by

Susumu CATO
Institute of Social Science
The University of Tokyo

and

Katsuhisa UCHIYAMA
Research Institute of Capital Formation
Development Bank of Japan

はしがき

本誌は，2018 年 9 月 6 日に開催された故大瀧雅之教授追悼シンポジウム「雇用・貨幣・リベラリズム : 大瀧雅之氏の研究を振り返って」の第一部の記録である。できる限りシンポジウムの当日の雰囲気が伝わるように編集を行いつつ，いくつかの箇所をより分かりやすくなるように補完したものである。また，当日配布された資料や報告中に利用されたスライドなどもできる限り本誌に加えている。

本誌の内容について簡単に説明したい。大瀧教授の経歴および開催の経緯などについては冒頭のあいさつのなかで説明されている。シンポジウムの第一部では，4 名の登壇者からなる 20 分ずつの講演が行われたが, 大瀧教授の幅広い関心を捉えられることを目的として, それぞれの登壇者に主題を調整したうえで報告をお願いさせていただいた。この講演の部分では，大瀧教授の学術的貢献を紹介することを意図していたが，その後，4 名の登壇者に加えて，2 名の追加のパネリストを加えるかたちで，50 分のパネルディスカッションが行われた。その議論のなかで，大瀧教授との個人的結びつきなどを語りつつ，どのように大瀧教授の研究が培われたのか，教授の幅広い関心がどこから来たのか，さまざまな業績を一貫するアイディアとは何かといったことが話題となった。そして，第 3 のパートでは社会科学研究所と設備投資研究所の OB が 1 名ずつ，大瀧教授との個人的な思い出を語っている。最後の閉会あいさつでは，当日の議論を振り返りつつ，大瀧教授の志を次の世代へとどのように引き継いでいくか，ということが提起された。

当日は，大瀧教授のご家族も含め，同教授に縁のある方々約 120 名がシンポジウムに参加した。本誌のなかには含まれていないが，第二部は献杯の後に大瀧教授との思い出を自由に語り合う暖かい時間となった。シンポジウムの準備の段階で，数えきれない多くの方々にご協力いただいた。とくに，東京大学社会科学研究所所長室の武神和子さんと設備投資研究所副主任研究員の細田裕子さんがいなければ，1 か月と少しという短い準備期間しかないなかでシンポジウムを実現することはできなかったように思う。さらに，本誌の作成にあたっては，設備投資研究所地球温暖化研究センターのメンバーの方々に多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

また，本誌と関わりのある内容が東京大学社会科学研究所で発刊される SSJ Newsletter の 60 号において特集される。本誌と合わせてご参照いただきたい。

本誌の 2 人の編者は幸運なことに，それぞれ，大瀧教授との暖かく深い交流に恵まれた。大瀧教授が亡くなられたことは学術界の大きな損失であるということは言うまでもないが, 我々にとっては楽しい友人と偉大な先輩を同時に失うということでもあった。教授の好きだった深い青色を見るたびに寂しい思いをする日々だが，本誌が大瀧教授の残した業績や

暖かい人柄を少しでも多くの人々に届けるための媒体となればと願っている。

2019 年 3 月

東京大学社会科学研究所
加藤　晋
日本政策投資銀行設備投資研究所
内山 勝久

東京大学社会科学研究所　シンポジウム
貨幣・雇用・リベラリズム：大瀧雅之氏の研究を振り返って

共催：日本政策投資銀行設備投資研究所

日時：　2018年9月6日（木）　15:00～19:30

会場：　東京大学福武ホール　ラーニングシアター（地下2階）

（敬称略）

総合司会　中村 尚史（東京大学社会科学研究所副所長）

第一部　シンポジウム「貨幣・雇用・リベラリズム：大瀧雅之氏の研究を振り返って」

15:00　開会挨拶　佐藤 岩夫（東京大学社会科学研究所長）

15:10　講演

堀内 昭義　（東京大学名誉教授）

田村 正興　（名古屋商科大学）

國則 守生　（法政大学）

加藤　晋　（東京大学）

16:30　休憩

16:40　パネルディスカッション

パネリスト　堀内 昭義（東京大学名誉教授）

間宮 陽介（青山学院大学・京都大学名誉教授）

國則 守生（法政大学）

竹下 啓介（一橋大学）

田村 正興（名古屋商科大学）

モデレーター　加藤　晋　（東京大学）

17:30　大瀧雅之氏の思い出

柳沼　壽　（法政大学名誉教授）

中村 圭介　（法政大学・東京大学名誉教授）

17:50　閉会挨拶　大石 英生（日本政策投資銀行設備投資研究所長）

第二部　献杯式（18:20～19:30）

1. 主賓スピーチ　仁田 道夫（東京大学名誉教授）
2. 献杯　神藤 浩明（日本政策投資銀行）
3. スピーチ　宇野 重規（東京大学）・徳井 丞次（信州大学）
4. 大瀧先生奥様ご挨拶

目　次

はしがき		i
全体プログラム		iii
Ⅰ．開会挨拶	佐藤 岩夫	**1**
Ⅱ．講演録		**3**
1．大瀧雅之さんの理論的業績	堀内 昭義	5
2.「大瀧モデル」について	田村 正興	9
参照資料：スライド		15
3．環境経済学と持続可能性——大瀧雅之さんの研究の軌跡	國則 守生	21
参照資料：スライド		26
4．経験主義とリベラリズム——大瀧先生の思想について	加藤　晋	33
Ⅲ．パネルディスカッション 大瀧雅之氏の研究の足跡をたどる	堀内 昭義・間宮 陽介 國則 守生・竹下 啓介 田村 正興・加藤　晋	**39**
1．議事録		41
2．参照資料：間宮陽介教授スライド		53
Ⅳ．大瀧雅之氏の思い出		**57**
大瀧雅之氏の思い出 1	柳沼　壽	59
大瀧雅之氏の思い出 2	中村 圭介	65
Ⅴ．閉会挨拶	大石 英生	**69**
付録		**71**

開会挨拶

佐藤 岩夫

東京大学社会科学研究所長

東京大学社会科学研究所長の佐藤と申します。本日のシンポジウムは東京大学社会科学研究所主催，日本政策投資銀行設備投資研究所の共催として開催させていただきます。僭越ではございますが，主催者を代表してご挨拶させていただきます。

本日は，ご多忙のところ大変多数の方にお集まりいただき，ありがとうございました。全国的には，一昨日の台風による大きな被害，本日は北海道で強い地震があり，いろいろ心配な状況でありましたが，本日，このシンポジウムを無事に開催することができ，ひとまず安堵しております。

さて，大変残念なことながら，本研究所の大瀧雅之教授が，本年 7 月 2 日にご病気のため逝去されました。享年 60 歳でいらっしゃいました。改めて大瀧教授のご冥福を心からお祈り申し上げます。

ご存じの方も多いと思いますが，最初に大瀧教授のご経歴を簡単に紹介させていただきます。大瀧教授は，1957 年 11 月に福島県いわき市にお生まれになりました。その後，福島県立磐城高等学校を卒業され，1977 年に東京大学教養学部文科二類に入学。1981 年 3 月に東京大学経済学部を卒業して，同年 4 月に東京大学大学院経済学研究科に進学されました。同研究科を修了された後，神奈川大学経済学部におきまして専任講師，助教授，その後青山学院大学経済学部におきまして助教授を歴任され，1996 年 4 月に東京大学社会科学研究所に助教授として着任されました。2001 年 4 月に教授に昇進され，本研究所における在職期間は通算 22 年間ということになります。この間，研究所の内外におきまして大変活発な活動をされました。とくに日本開発銀行，現在の日本政策投資銀行の設備投資研究所におきましては，大学院在学中より嘱託研究員として活躍され，また近年は顧問として，実務とアカデミズムをつなぐ重要な役割を果たされたと伺っております。

大瀧教授は，マクロ経済学，景気循環理論，経済成長理論の分野で優れた研究を行い，大変多数の著書・論文を発表しておられます。お手元の冊子に詳しい業績一覧を掲載しておりますので後ほどご覧いただければと存じますが（付録；p. 85），なかでも 1994 年に東京大学出版会から刊行された『景気循環の理論――現代日本経済の構造』では，第 37 回日経・経済図書文化賞を受賞されました。その後も大変活発な研究活動をされ，とくに近年の目覚ましい研究成果の発表には驚かされるばかりです。2013 年からのわずか 5 年間に，著書だけ

を数えても日本語の著書が 2 冊，英語の単著が 3 冊，加えて英語の共著が 1 冊，合計 6 冊を発表されるという，驚くべき数の研究成果を発表されておられます。私自身は法学が専門のため，質・量ともに優れた大瀧教授の学問的な業績を専門的な立場から論評することはできませんので，それはこのシンポジウムにおける，この後のご講演とパネルディスカッションに譲りたいと思います。

大瀧教授は折に触れて，ご自身が発表された論文等を研究所の同僚にお配りになる習慣をお持ちで，私もその恩恵にしばしばあずかりました。さすがに英語の専門的なジャーナルに発表された論文は私にとっては歯が立ちませんでしたが，私が理解できる限りで，頂戴したものをよく拝見いたしました。いわゆる構造改革なるものは，市場が健全な機能を発揮するための基礎的な条件あるいは基礎的な秩序を整え，既得権力の偏った利益に奉仕することを是正する意図で行われるものですが，大瀧教授は最近の一連の論文のなかで，そのような不健全な市場経済を正していく必要があるという旨の分析をされており，これには大変目を開かされました。また，堅固な経済理論研究を補完するため実証的なデータを用い，あるいは，例えばジョン・ロールズやハンナ・アーレントといった思想家の言葉を引きつつ，人間と社会に関する鋭い考察を生き生きと展開される大瀧教授の研究は，大変スリリングだと思っております。

ただ，うっかり大瀧教授に，例えばエレベーターや廊下で会ったときに，あの論文は面白かったというようなことを申し上げると，直ちに大瀧教授からは，どこがどのように面白かったのかというような反問がありました。するとたちまち，私の理解が浅薄であることが分かり，しどろもどろで説明をするといったような大変に緊張感に満ちた時間も，今となっては懐かしい思い出です。

本日は，第一部として大瀧教授の学問に焦点を合わせる形でのシンポジウム，第二部としてもう少しフランクに大瀧教授の思い出を語る献杯式の，二部構成を予定しております。第二部におきましては，奥様よりご挨拶を頂戴する予定でおります。

皆様ご存じの通り，大瀧教授は学問に対しては大変厳しく，真摯に学問に取り組まれる学者でしたが，それと同時に，会場の外の写真を見ていただければ分かりますが，笑顔が大変素敵な先生でもありました。本日のシンポジウムが，大瀧教授の生前の人と学問を偲ぶとともに，その優れた学問を次の世代に継承していく，そのような機会になりますことを願っております。

簡単ではございますが，以上主催者を代表してのご挨拶とさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

シンポジウム「雇用・貨幣・リベラリズム：大瀧雅之氏の研究を振り返って」

講演録

講演 1　大瀧雅之さんの理論的業績

堀内 昭義　東京大学名誉教授

講演 2　「大瀧モデル」について

田村 正興　名古屋商科大学ビジネススクール専任講師

講演 3　環境経済学と持続可能性——大瀧雅之さんの研究の軌跡

國則 守生　法政大学人間環境学部教授

講演 4　経験主義とリベラリズム——大瀧先生の思想について

加藤　晋　東京大学社会科学研究所准教授

講演 1

大瀧雅之さんの理論的業績

堀内 昭義

東京大学名誉教授

経済学とパラダイムシフト

堀内でございます。私は大瀧雅之さんのマクロ経済学，それからマクロ経済学に関連する金融の研究についてご紹介したいと思います。

ご列席の皆さんはおそらく，トーマス・クーンという科学史の研究家が 1960 年代に唱えたパラダイムという概念をご承知だと思います。パラダイムというのは，簡単に申しますと，どのような学問分野においてもメーンストリームになる理論，といった意味です。そして，パラダイムシフトというのは，その主流の理論が，ときとともに多くの場合は極端に変遷することを言います。私なりにクーンの考え方を表現すれば，どのような学問分野においても，学問が進化するということは，古い学説の上に新しい学説が積み上げられるのではなく，古い学説が根こそぎ捨て去られて新しい理論がメーンストリームとして受け入れられていくというものだというのです。例えば考古学の世界では，19 世紀の半ばに古い考古学を支配していた学説を根本的に変える説，つまり「進化論」をダーウィンが唱え，全く新しい理論，生物学上の起源論を提起しました。その結果として，ダーウィン以前に考古学を支配していた学問は捨て去られます。ダーウィン流の進化論がその後の考古学の発展を大いに促進したということが知られております。

同様のことを経済学に当てはめますと，ダーウィンに相当する人物がいるとすれば，それはジョン・メイナード・ケインズです。ケインズは 1936 年に，今日『一般理論』（『雇用，利子および貨幣の一般理論』）と呼ばれる書物を発表し，当時の経済学界を支配していた新古典派経済学をほとんど根底から覆す理論を明らかにしました。深刻な失業問題に悩む政府が新しい政策手段を提供する，その理論的支柱となったのはケインズの『一般理論』であり，新しい学説として経済学，とりわけマクロ経済学の様相を完全に変えてしまうようなものであったと言えると思います。

パラダイムに相応しい大瀧さんの研究

こうした学問一般の発展の様相に私が言及した理由は，実は大瀧雅之さんの書かれている理論というものが，マクロ経済学におけるパラダイムの変化を引き起こすべき学説にな

っていると考えるからです。経済学の現状，とりわけマクロ経済学と呼ばれる分野の最近の状況を考えてみますと，日本においては長らく経済が低迷するなか，マネーサプライの増加率を高める形での，日本銀行に依拠する景気回復策が採用されていますが，この政策は必ずしもうまく機能していません。実際には，日本銀行のそうした努力にも関わらず，景気が十分には回復していないというのが一般の理解だと思いますし，マネーサプライは増加しているにも関わらず，物価水準は全く上昇しないという状況が続いています。これは簡単に言ってしまいますと，ロバート・ルーカスという経済学者が 1970 年代に説いたマネーサプライを中心とする経済政策理論が結局のところは成功していないということを示唆しています。ご承知のように，ルーカスはノーベル経済学賞を受賞した高名な経済学者ですが，彼の唱えた貨幣中立説という概念は，現実，例えば日本の経済に当てはめて考えると，妥当性がないということを示しているのです。

後ほどご紹介したいと思いますが，大瀧さんの先生である宇沢弘文教授がこうした状況を批判して，もっと日本の現状にそぐうような新しい理論をつくりたいと考えていらして，何度もそれに挑戦したことがあります。しかし宇沢教授のこころみは成功しませんでした。ところが宇沢教授のお弟子さんである大瀧さんは，その理論的な展開に成功したと私は考えています。それは，彼が最近執筆し，間もなく出版される著書 *Speculative Bubbles and Monetary Policy: A Theory Based on Japanese Experience*（Lexington Books）のなかで非常に的確に示されています。この書籍のなかで，彼は日本経済の歴史，とくに高度成長期から最近の状況に至るまでの，とりわけ金融施策に関わる経済的な問題を指摘し説明しておられますが，先ほど申しましたようなマクロ経済の低迷に対する解決策として，彼が開発した動学的一般均衡モデルを，比較的分り易い形で紹介しています。私に言わせれば，実は彼のこのモデルこそが，新しい学問の流れをつくるものだと思います。大瀧さんは新しい見解としては，ルーカスが唱えた動的な均衡も一つの均衡としては是認できるけれども，その均衡はスペシャルケースであり，むしろ実際には成り立ちにくいものだということを，彼のモデルによって大変スムーズな形で証明しています。私の説明だけでは皆さんがどのように思われるか量りかねますけれども，この理論は，ルーカスが唱えたような貨幣中立説を明らかに超えているようなもので，新しい学問的なきっかけをつくっていく，そういう新しいパラダイムだと思うのであります。

大瀧さんの学問的成果の普及に向けて

この点については，実は昨年（2017 年）の年末に，一橋大学の花崎正晴さんとご一緒にある会社の社長さんにお目にかかって議論する機会がありました。そのときに，実は最近大瀧さんがこういう理論を展開しているということを，私は非常に簡単な形で，その社長さんに説明しました。そのときは大瀧さんが，新しい年になった段階でご自分からそういう理論を

展開し，それを一般に普及させていくという活動をするに違いないと思っておりましたので，非常に簡単な話で済ませたわけです。ところが大瀧さんが急逝され，この新しい理論を自ら皆さんに紹介できなくなってしまったということでありまして，これは非常に残念なことです。私の願いは，皆さんに大瀧さんの理論――理論的な理論はもちろんですが，それがどのように日本の経済という現実に適用できるかというところまで含めた「理論」――を是非 *Speculative Bubbles and Monetary Policy* という，これから出版される書籍を通じて知っていただきたいということです。それが，大瀧さんの最近の学問的成果・ご功績のなかで最も重要な部分ではないかと私は思うわけであります。

その他，宇沢先生との学問的な関係や，その研究への影響などのお話については，ここではあまり時間がありませんので，この後のパネルディスカッションで簡単に触れることにしたいと思います。いずれにしましても，大瀧さんが成し遂げつつあった学問的な業績の進展――彼が完成させた新しいマクロ経済学モデル――を世に問うて，マクロ経済学のパラダイムをシフトさせるという仕事は，実はまだ残されています。このことは非常に残念なことです。それと同時に，この種の研究はとくに若い研究者の皆さんが取り組んでしかるべき非常に重要な研究課題であると考えています。大瀧さんは生前，さまざまな分野の研究に取り組んでこられましたが，本日ご紹介した *Speculative Bubbles and Monetary Policy* で著されている内容が，理論的な研究において最も華々しい成果を上げたものであると考えています。

繰り返しになりますが，大瀧さんと宇沢先生との関係についてはできれば後ほどご紹介したいと思います。私の最初のお話はここで終了いたします。ありがとうございました。

講演２

「大瀧モデル」について

田村 正興

名古屋商科大学

「大瀧モデル」完成までの変遷

田村正興です。私は東京大学で，大瀧先生のご指導のもとで博士号を取得しました。そのような意味で，大瀧先生の教え子――弟子なわけですが，本日は「『大瀧モデル』について」と題してお話させていただきます。堀内先生からもお話がありましたが，大瀧先生がここ 20 年ほどのなかでお考えになり完成させたモデルを，ここでは「大瀧モデル」と呼んでいます。最初に公表されたのは2007年で，*Economics Letters* という雑誌に載った論文だと思います（Otaki, 2007）。私が大学院に在学していたのが 2005 年からですので，ちょうどそのとき大瀧先生がこのモデルと格闘し完成させていくのを，講義等を通じて見ることができました。こうした経緯から，先生ともよく議論をさせていただいておりましたので，私からは非常に興味深く重要なモデルであるこの「大瀧モデル」についてお話しさせていただきます。

ただ，モデルの全貌をお話しするわけではありません。私が先生の業績を見ていくなかで気づきがあった部分なのですが，「大瀧モデル」は初めから完成していたというよりは，大別すれば「前期大瀧モデル」と「後期大瀧モデル」に分けることができ，その間で少し変わっています。私も時々同僚や仲間の研究者から大瀧先生のモデルについて質問を受けることがありますが，「難しくてここが分からなかった」という質問に対して解説しているうちに，「大瀧モデル」には断絶があり，例えば「前期大瀧モデル」を読んだがゆえに，「後期大瀧モデル」を読んで少し分かりにくくなってしまったりするケースがあるように感じました。このため，私はこの断絶の部分を解説させていただきたいと思います。大瀧先生があまり解説されていないところですし，主に「大瀧モデル」を今まで見たことがある方に向けての話になってしまいますが，「大瀧モデル」を理解するためのお話とさせていただきたいと思います。話の柱は 2 つで，まず初めに「大瀧モデル」の背景と含意をまとめ，その次に，OLG（Overlapping Generations）モデルに対する仮定――この仮定が前期と後期で変化したというのが私の意見なのですが――この仮定の面から大瀧モデルを読み解いていこうというのが本日の狙いです（**スライド２；p. 15**）。

前期大瀧モデルの特徴

はじめに，まず大瀧モデルで大瀧先生が示したことをご紹介します（スライド 3 ; p. 16）。主に三つありまして，一つ目はミクロ的基礎を持ったマクロ経済モデルでの財政・金融政策の有効性。二つ目が貨幣の非中立性。三つ目は，ケインズ経済学の根幹は不完全競争や価格の硬直性ではないということです。一つずつお話ししていきたいと思います。

まず一つ目の財政・金融政策の有効性について，背景からお話しさせていただきます（スライド 4 ; p. 16）。財政支出を行うと，それが誰かの所得になる。その人たちは一部を貯蓄するけれども，大部分は消費するため，それがまた誰かの所得になり，また消費する……。この流れが連なっていき景気がよくなるという議論を，マクロ経済学では乗数効果と呼びますが，モダンなフレームワークである一般均衡理論のなかでも乗数効果が起こるのかどうかを分析したのが Mankiw（1988）や Reinhorn（1998）らの研究です。これら前提にあるのは不完全競争，つまり独占などがある状況であり，これらの研究で，不完全競争下では乗数効果が起こるということは既に明らかにされていました。

前提としてなぜ不完全競争下を仮定しているかというと，完全競争下とは反対に，企業に利潤があることを仮定するためです。財政支出を行うことで，企業が利潤を増やす。企業が利潤を増やすと，それは企業の大もとの所有者である消費者の所得になる。そうして，消費者がまた消費を増やし，企業の利潤が増える……という流列が出てくる。これを先ほどお話ししたクラシックな乗数効果の現代版として，彼らは提示したわけです。

しかしながら問題があるのは，彼らの研究に基づけば，財政政策により経済厚生，すなわち経済的な豊かさが悪化するという結果になることです。最初に「大瀧モデル」が提示された 2007 年には，大瀧先生はこの豊かさが低下するという点に対してカウンターパンチを行う形でモデルを提示しました。そこでは不完全競争に加え，OLG モデルを用いて貨幣をモデルに組み入れています。あまり深くお話しすることはできませんが，若者と老人がいる経済があり，次の期になったら老人が退出して，新しく若者が生じ，もとの若者は老人になる――そうした，世代ごとのつながりがあるような経済を描写すると，若者と老人の間ではお金のつながりができ，モデルに貨幣を導入できるわけです。また，労働者は自分で労働時間を自由に決めるわけではなくて，働くか働かないかを選択する――これを不可分労働と大瀧先生は呼んでいますが，この不完全競争，貨幣，不可分労働という三つの仮定のもとで大瀧先生はモデルを考えています。

その結果，この三つの仮定を入れたもとでは，財政政策で乗数効果が起こり，かつ経済厚生が高まるという結論を導いた。これが最初に「大瀧モデル」を提示したときに行った説明です。大瀧先生はこの時点では，貨幣発行によってファイナンスされた財政政策は乗数効果をもたらし，経済厚生もよくなる，といったストーリーで説明しており，初期の頃の先生の著書においても，乗数効果が経済厚生を高めることの説明として「大瀧モデル」が提示され

ています。しかしながら大瀧先生は，本当はこれからお話しする「貨幣の非中立性」が根幹のはずであり，これをストーリーの中心にしたいのだとよく仰っていました。ただ論文を投稿したときに，レフェリーから「そこは削れ」と言われたと私は聞いています。そうしたこともあって，当初は，財政政策が経済厚生を高めることを強調されていたのだと思います。

前期大瀧モデルの貨幣に関する仮定

この 2007 年から 2010 年頃にかけての説明を「前期大瀧モデル」とするならば，2011 年頃くらいから少し説明が変わってきています。その点を簡単に説明したいと思います。ここでは，前期大瀧モデルの代表的文献として Otaki（2007），大瀧（2008）を挙げていますが（**スライド 5；p. 17**），この二つの文献のなかでは，先ほどお話ししたように乗数効果が強調されています。少しだけ詳しくお話しすると，大瀧先生は

企業の労働需要：　$p_t = \frac{w^R}{1-\eta^{-1}}$

企業の労働需要＆消費者の労働供給：　$p_t = \left(\frac{A^{-1}\beta}{1-\eta^{-1}}\right)^{\frac{1}{1-\alpha}} p_{t+1}$

という二つの式をモデルの基本としていました。「企業の労働需要＆消費者の労働供給」の式におけるP_tとP_{t+1}，これはそれぞれ現在の物価と将来の物価を表しており，途中にある$\left(\frac{A^{-1}\beta}{1-\eta^{-1}}\right)^{\frac{1}{1-\alpha}}$ はパラメーターですが，つまりこの式で現在の物価と将来の物価の間に一定の比率が決まっているのだということが示されています。しかし，OLG モデルというのは一般に，複数均衡の問題が発生することが知られています。P_tとP_{t+1}，すなわち今期と来期の物価の比率は分かるのですけれども，P_tとP_{t+1}をそれぞれはっきり数値として決められるかというと，決められない。つまり，貨幣を導入したがゆえに，いわば複数均衡の問題が発生したという問題がありました。

「前期大瀧モデル」では，このように複数経路のP_tとP_{t+1}で経済が描写できてしまう。それははっきり言ってしまったら何でもよいということになってしまい，経済モデルとしては面白くないということで，「前期大瀧モデル」では「実質貨幣残高（M_t/P_t）が今期任意に選べるなら」という仮定を（暗に）置いて議論が進められています。仮定を一つ追加すると，均衡が複数ではなく，一つ決まります。しかし，実質貨幣残高が今期任意に選べるという仮定は，そもそも適切なのか，強過ぎないかということを大瀧先生は気にされていたと思います。マネーストックM_tを増やすと，その分P_tが比例的に増加する，すなわち，M_t/P_tは今期自由に選べないというのが貨幣数量説ですが，自由に選べるというルールを仮定している時点で，いわば貨幣の非中立性そのものを仮定してしまっており，仮定として強過ぎるのではないか。そうした懸念が大瀧先生にはおそらくあったのではないかと思います。

後期大瀧モデルと貨幣の非中立性

そこで「後期大瀧モデル」では，この実質貨幣残高を選べるという仮定を置き換えて同じ結論を導いています（スライド 6；p. 17）。どのような仮定を置いたのかというと，2011 年以降に著された Otaki（2011，2012，2015），大瀧（2011，2013）で明らかなように，「人々が，貨幣供給量（M_t）が物価（P_t）に影響しないという期待を持つなら」という期待を仮定したわけです。つまり，期待が自己実現するという経済学でしばしば出てくるストーリーを用いて，このような期待を持っていたら本当に貨幣供給量が物価に影響しない，つまり前期大瀧モデルと同じように，実質貨幣残高を今期任意に選べて貨幣が非中立的な世界になるという論理で，後期では同じ結論を導き出したということです。

このように，前期から後期に至ってモデルの仮定が変わっており，2011 年以降大瀧先生は，「貨幣の非中立性，すなわち貨幣の信頼性がとにかく重要である」と論じられるようになりました。貨幣の信頼性がある経済だとケインズ的な経済になる。つまり，財政政策は乗数効果を持ち，Welfare Improving になるという「前期大瀧モデル」と同じ結論を，仮定を変えても示しています（スライド 7；p. 18）。

しかも，二つ目，「後期大瀧モデル」の仮定はより分かりやすく，期待を持っていたら自己実現するというストーリーで，論理にも無理がないように思います。こうしたことからも，私はこの「後期大瀧モデル」で「大瀧モデル」が完成したのではないかと思っています。前期のモデルと後期のモデルをそれぞれ読むときには，後期においては仮定が変わっているということを念頭に置くと，もう少し理解しやすくなると思います。

ケインズ経済学の根幹とは

「後期大瀧モデル」の仮定に関して大瀧先生は，「我々消費者が生きていく生活上で，誰がマネーサプライ，マネーストックを気にしているのだ。そんなもの気にしないだろう」という説明をよくされていました。要するに，我々が何となく思っている，「貨幣の価値はある程度は変わらない，信頼できる」といううっすらした期待――すなわち貨幣への信頼性が，言ってみたらケインズ経済学のもとになっており，しかもそれがきちんと Self-fulfilling しているというところがモデルの要点になってくるわけです。

少し深い話になってしまいましたが，「後期大瀧モデル」になるに至って大瀧先生は，財政政策の有効性だけではなく，貨幣の非中立性についてもよく言及するようになります。それは当然で，貨幣発行によってファイナンスされた財政政策は Welfare Improving であり，財政政策は乗数効果を持ち経済厚生を高めるという結論は，前期と後期で仮定を変えても変わらなかった。加えて，貨幣の価値を信頼できると人々が期待している，という仮定の重要性に気づいたがゆえに，大瀧先生はケインズ経済学の根幹として，貨幣の非中立性を論じる

ようになったと考えられます。

先ほど堀内先生の話のなかでも，ルーカスの 1972 年の論文（Lucas, 1972）の均衡はスペシャルケースであるというお話がありましたが，「後期大瀧モデル」を使い始めたころの Otaki（2012）では，それを実際に示しています。先ほど大瀧モデルの基礎に貨幣への信頼という仮定があるというお話をしましたが，大瀧先生は，この貨幣の「信頼性」は，ひょっとしたら大瀧モデルでしか通用しないことなのではないかということを懸念されていたと思います。そこで，貨幣の中立性を示したルーカスのモデルに，貨幣の信頼性を組み入れてみると何が起こるかを論じたのが 2012 年の論文であり，結果としてルーカス・モデルでも貨幣が非中立的になることを明らかにしています。つまり，ルーカス・モデルにおける新古典派の議論というのはスペシャルケースであるということを実際に証明した上で，「貨幣への「信頼性」という仮定は重要な Keynesian Economics の根幹である」ということを論じています（**スライド 8；p. 18**）。

また，大瀧先生は大瀧（2011），Otaki（2015）で，ケインズ経済学の根幹は，不完全競争や価格の硬直性ではないということを述べています。Springer から出された *Keynesian Economics and Price Theory*（Otaki, 2015）では，貨幣の信頼性があれば先ほどお話ししたような結論が出てくる一方，貨幣数量説的な期待を持てば，今度は新古典派的な結論になる――つまり複数均衡なものですから，期待の持ちようによってさまざまな均衡があるということを示しています。

一方，不完全競争が完全競争の世界になって，他のモデルの他の設定を変えなければどうなるかについては，それでもやはり乗数効果は存在して，ケインジアン的な世界になるということを大瀧先生は証明しています。つまり，完全競争にしても結果があまり変わらないのであれば，不完全競争はケインズ経済学にとっての根幹ではなく，むしろ，人々の期待の持ち方――貨幣の非中立性が大事になると言えます。期待の持ち方次第でモデルが Keynesian になるのか新古典派になるのかが大きく変わることを示しているがゆえに，大瀧先生は後のテキストや新書などで，よく期待の話を強調されています。それはモデルの仮定としてとても重要だったからです（**スライド 9；p. 19**）。

大瀧モデルのまとめ

最後に，今までの簡単なまとめをしてみたいと思います（**スライド 10；p. 19**）。まず一つ目，「前期大瀧モデル」と「後期大瀧モデル」では強調しているところが違うということです。前期では，財政・金融政策は乗数効果を持ち有効であるということを，後期では，貨幣への信頼性や貨幣とケインズ経済学などについて論じることが多くなっています。この傾向は，一般向けの本などにおいても同じです。この背景には，複数均衡への対処として何か仮定を置く必要があり，その仮定こそが貨幣への信頼性であったことが，大きく効いている

と考えられます。ですから，前期と後期とで，大瀧先生の説明の方法が変わっているということです。

二つ目は，貨幣の信頼性です。ルーカス・モデルに組み入れることができたように，貨幣の信頼性は一般的な興味深い概念であるということです。

また 3 つ目として，これは文献案内になりますが，「後期大瀧モデル」，すなわち完成版の「大瀧モデル」について最もコンパクトに解説されているのは，2015 年に Springer から出された *Keynesian Economics and Price Theory*（Otaki, 2015）の第 2 章ではないかと思います。そこでは，期待の重要性などが書かれていて，総括的なまとめとしてもとても読みやすいと私は感じました。ちなみに，2018 年に書かれた『経済学』という勁草書房から出版されたテキストの第 5・6 章では（大瀧，2018），おそらく大瀧先生は期待の話が難しすぎると感じられたのか，「前期大瀧モデル」の体裁をとっています。

以上で，大瀧モデルについてのお話を終えさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

参考文献

大瀧雅之（2008），「乗数およびインフレ理論のミクロ的基礎――デフレイションは本当に悪か？」大瀧雅之［編］『平成長期不況――政治経済学的アプローチ』，東京大学出版会．

大瀧雅之（2011），『貨幣・雇用理論の基礎』，勁草書房．

大瀧雅之（2013），『国際金融・経済成長理論の基礎』，勁草書房．

大瀧雅之（2018），『経済学』（アカデミックナビ），勁草書房．

Lucas, R. E. Jr. (1972), “Expectations and the Neutrality of Money,” *Journal of Economic Theory*, 4(2), 103-124.

Mankiw, N. G., (1988), “Imperfect Competition and the Keynesian Cross,” *Economics Letters*, 26(1), 7-13.

Otaki, M. (2007), “The Dynamically Extended Keynesian Cross and the Welfare-improving Fiscal Policy,” *Economics Letters*, 96(1), 23-29.

Otaki, M. (2011), “A Pure Theory of Aggregate Price Determination,” *Theoretical Economics Letters*, 1(3), 122-128.

Otaki, M. (2012), “A Study on Lucas’ “Expectations and the Neutrality of Money”,” *Theoretical Economics Letters*, 2(5), 438-440.

Otaki, M. (2015), *Keynesian Economics and Price Theory: Re-orientation of a Theory of Monetary Economy*, Springer.

Reinhorn, L. G., (1998), “Imperfect Competition, the Keynesian Cross, and Optimal Fiscal Policy,” *Economics Letters*, 58(3), 331-337.

「大瀧モデル」について

田村正興
名古屋商科大学ビジネススクール

1

目的

大瀧先生が近年自信を持って完成させ、近年マクロ経済を論じる際には常にその基礎としていた「大瀧モデル」について…

- ✓ **大瀧モデルの背景と含意をまとめ、**
- ✓ **「OLGモデルへの仮定」という面からそれらを読み解く。**

2

「大瀧モデル」で大瀧先生が示したこと

ミクロ的基礎を持ったマクロ経済モデルでの…

1. **財政・金融政策の有効性**
2. **貨幣の非中立性**
3. **ケインズ経済学の根幹は不完全競争や価格の硬直性ではない**

3

1. 財政・金融政策の有効性

Mankiw(1988), Reinhorn(1998)

不完全競争 → 財政政策で乗数効果。経済厚生は低下。

財政政策

→ 企業の利潤増加 → 人々の所得増加 → 人々の消費増加
→ 企業の利潤増加 → 人々の所得増加 → 人々の消費増加
→ …このまま続いていく

Otaki(2007)

不完全競争
＋貨幣(OLG)
＋不可分労働 → 財政政策で乗数効果。経済厚生は上昇。

Otaki(2007)の結論

貨幣発行によってファイナンスされた財政政策は乗数効果をもたらし、財政支出が直接効用に入らなくても、Welfare Improving。
（＝財政・金融政策の有効性）

…OLGの複数均衡の性質が効いている

4

前期大瀧モデル（2007-2010）から
後期大瀧モデル（2011-2018）へ

前期大瀧モデルの代表的文献：
Otaki (2007) *Economics Letters*
編著『平成長期不況　政治経済学的アプローチ』（2008）

企業の労働需要 → $p_t = \frac{W^R}{1-\eta^{-1}}$

企業の労働需要 ＆ 消費者の労働供給 → $P_t = \left(\frac{A^{-1}\beta}{1-\eta^{-1}}\right)^{\frac{1}{1-\alpha}} P_{t+1}$

インフレ率は実物面だけで決定。しかし、物価水準は複数均衡があるため不決定。

一般にOLGモデルは複数均衡。
追加の仮定（終点条件、利子率が「小さくない」こと、etc が必要

複数均衡の問題に対処するため、
前期大瀧モデルは「実質貨幣残高($\frac{M_t}{P_t}$)が今期任意に選べるなら」という仮定を（暗に）置いている

...この仮定は適切か？...貨幣の非中立性の説明は？...
そのため前期大瀧モデルは「乗数理論」を強調している。

5

前期大瀧モデル（2007-2010）から
後期大瀧モデル（2011-2018）へ

後期大瀧モデルの代表的文献：
Otaki (2011, 2012) *Theoretical Economics Letters*
『貨幣・雇用理論の基礎』（2011）
『国際金融・経済成長理論の基礎』（2013）
“Keynesian Economics and Price Theory” (2015)

前期大瀧モデルと同値となるような、より適切な仮定を探す中、大瀧先生が目を付けたのが、期待形成のあり方。

前期大瀧モデルの仮定　「実質貨幣残高($\frac{M_t}{P_t}$)が今期任意に選べるなら」

後期大瀧モデルの仮定　「人々が貨幣供給量（M_t）が物価（P_t）がに影響しないという期待を持つ」

（貨幣の信頼性＝貨幣の非中立性）

→ 期待が自己実現して実際物価に影響しない

→ 前期大瀧モデルの仮定と実質的に同じなので、結論も同じ

6

2. 貨幣の非中立性

後期大瀧モデルの結論:

- ✓ 貨幣発行によってファイナンスされた財政政策は、たとえ直接効用に入らなくてもWelfare Improving。
- ✓ 複数均衡が存在してしまうことに対処するための仮定、「貨幣の価値が信頼できる」という人々の期待こそが重要。（＝貨幣は非中立的）

7

2. 貨幣の非中立性

貨幣の「信頼性」は大瀧モデルの中だけで機能するのか？

貨幣の中立性を示したLucas（1972）に、貨幣の信頼性を入れるとどうなるか？（Otaki, 2012）

→ Lucasモデルでも貨幣が非中立的に。

→ 貨幣の「信頼性」という仮定は他のモデルでも機能する、より一般的な概念。

8

3. ケインズ経済学の根幹は不完全競争や価格の硬直性ではない

- “Keynesian Economics and Price Theory” (2015)
  期待「貨幣の信頼性」 → 貨幣の非中立性 & 有効需要の理論（乗数効果および45度線分析）
  期待「貨幣数量説」 → 貨幣の中立性

- 『貨幣・雇用理論の基礎』（2011）
  完全競争でも上と同じ
  （ただし経済厚生は異なる）

9

結びにかえて

- ✓ 前期大瀧モデル（2007-2010）と後期大瀧モデル（2011-2018）では強調している面が異なる。
  前期：財政・金融政策の有効性
  後期：貨幣への信頼性、貨幣とケインズ経済学

…これは、複数均衡に対処するため、使う仮定が変わったことによる。

- ✓ 貨幣への信頼性は、より一般的に使用できる興味深い概念

- ✓ 後期大瀧モデルの概要が最もコンパクトに解説されているのは、“Keynesian Economics and Price Theory”（2015）のChapter 2だと思われる。なお、『経済学』（2018）5章・6章は2018年の本であるものの、前期大瀧モデルを分かりやすく記述している。

10

参考文献

大瀧雅之（2008），「乗数およびインフレ理論のミクロ的基礎――デフレイションは本当に悪か？」大瀧雅之［編］『平成長期不況――政治経済学的アプローチ』，東京大学出版会.

大瀧雅之（2011），『貨幣・雇用理論の基礎』，勁草書房.

大瀧雅之（2013），『国際金融・経済成長理論の基礎』，勁草書房.

大瀧雅之（2018），『経済学』（アカデミックナビ），勁草書房.

Lucas, R. E. Jr. (1972), “Expectations and the Neutrality of Money,” *Journal of Economic Theory*, Vol. 4(2), 103-124.

Mankiw, N. G., (1988), “Imperfect Competition and the Keynesian Cross,” *Economics Letters*, Vol. 26(1), 7-13.

Otaki, M. (2007), “The Dynamically Extended Keynesian Cross and the Welfare-improving Fiscal Policy,” *Economics Letters*, Vol. 96(1), 23-29.

Otaki, M. (2011), “A Pure Theory of Aggregate Price Determination,” *Theoretical Economics Letters*, Vol. 1(3), 122-128.

Otaki, M. (2012), “A Study on Lucas' “Expectations and the Neutrality of Money”,” *Theoretical Economics Letters*, Vol. 2(5), 438-440.

Otaki, M. (2015), *Keynesian Economics and Price Theory: Re-orientation of a Theory of Monetary Economy*, Springer.

Reinhorn, L. G., (1998), “Imperfect Competition, the Keynesian Cross, and Optimal Fiscal Policy,” *Economics Letters*, Vol. 58(3), 331-337.

11

講演 3

環境経済学と持続可能性——大瀧雅之さんの研究の軌跡

國則 守生

法政大学

大瀧さんと環境経済学

大瀧さんには本当にお世話になりました。今日は環境の話をさせていただくのですが，大瀧さんが環境の研究をされているというのはあまり知られていないかもしれないので，この分野でどのような仕事をされてきたのかということについて，私なりにまとめてみました。ただし，理論家である大瀧さんの論文を私がすべて理解しているわけではないので，その点についてはご了承いただきたいと思います。

最初に私が強調したいのは，大瀧さんは環境分野でも社会正義に対する情熱や関心を強く持っていたということです（スライド 2；p. 26）。大瀧さんは，宇沢弘文先生と同様に地球温暖化問題の深刻さを非常に憂慮し，我々の対応はこれでよいのかということを大変気にされていました。宇沢先生は 1990 年代から地球温暖化問題に関する論文・著作もたくさん発表されていますが，大瀧さんも 2010 年代前半から温暖化問題の重要性に注目され，それを理論のなかでどのようにアプローチしていけばよいのかということを研究してこられたと思っています。

環境問題に関する大瀧さんの最初の論文として，私が知っているのは 1998 年の『コモンズと異世代間の資源配分』というエッセイ的な小論文です（大瀧，1998）。この論文のエッセンスについては，後ほど少しお話しします。

大瀧さんが我々とよく環境問題を話し始めたのは，2001 年から 2002 年頃でした。環境問題やサステナビリティの問題をどのように考えればよいのかということについて，大瀧さんに解説してくださいとお願いしたところ，快く引き受けていただきましたが，このことが，逆に大瀧さん自身が環境問題をさらに深く考えようというきっかけになったのではないかと想像したりしています。

その後は，スライドにも挙げていますが，とくに 2010 年以降，英語のものを中心に，環境問題に関する論文を執筆して蓄積されました。ここでは全部で 9 本挙げています（スライド 3, 4；p. 27）。なかでも 2015 年から 2016 年，2017 年——先ほど田村さんからご紹介があったように，この時期にはマクロ経済分野の論文を数多く出されているのですが，その合間を見つけてなのか，環境問題に関する論文も多く書いておられます。これらを本にされたい

と準備されていました。

大瀧さんの環境研究のなかで，私が特徴的であると思ういくつかをご紹介します。

最初にサステナビリティを考えてくださいとお願いした際，読み始めた本が Pezzey and Toman（2002）の *The Economics of Sustainability* という論文集です（スライド 5 ; p. 28）。そこに，Pezzey の論文が 2 点収録されていますが，その 1 点にある図を想い出します。今日の話には直接関係ないのですが，大瀧さんとよくこの話をしたので，懐かしく思って紹介します。図には 2 つの形が描かれており，第 1 番目の形は，断面が長方形（□）の鉄を表しています。第 2 番目の形は I 字型（Ⅱ）をしており，その構造物は鉄からつくられる断面がレールのような形を示しています。重さとしては第 1 の形よりも 40%くらい軽く，つまり使用する資材の量は少ないので，第 2 の形の構造物を使えばより少ない資源の消費に留めることができる。こうした構造物を使えば資源の消費量を少なくしてもよりサステナブルな構築物をつくれるのではないか，といったことを当時議論したように記憶しています。

負の外部性と割引率に関する研究

大瀧さんは，CO_2 排出などの環境問題というのは本質的にはダイナミック（動学的）な話であろうと仰っていました（スライド 6 ; p. 28）。スタティック（静学的）な面もありますが，一番重要なのは異時点にまたがる外部性に対してどのように対処するのかということです。現世代は長く生きられない一方で，外部性の問題が世代を超えて長期間にわたって続いていく場合，現世代は後世代の人に対して負の外部性を及ぼしているにも関わらず，後世代の人は現世代の人に対して「このようなことをやられては困る」ということを文字通り言うことができない。この問題をどのように考えなければならないかに関して，大瀧さんは大瀧（1998）では，社会的共通資本の管理は難しく，コモンズの問題を長期的には解くのは難しいということを仰っていました。

その後大瀧さんは，最適成長論のなかでそうした問題をどのように考えていけばよいのかということを，効用積分などを用いて分析され始めました（スライド 7 ; p. 29）。これは宇沢先生が用いたものと同じようなフレームワークですが，特徴的なのは割引率の問題です。つまり，将来の消費による効用を現在価値に割り引いて考えるわけですが，割り引くというのはどのような性質があるのかということを大瀧さんは深く考えられました。取りかかりとして，この問題を定常状態で考えられたのですが，定常状態でゼロの割引率であるということは，その分権化経済で最適な炭素税が賦課されていることと同値であるということを Otaki（2013a）の論文で見出されました。逆に言えば，定常状態でプラスの割引率が適用されているとすると，そのときは分権化社会のなかで最適な炭素税よりも小さい炭素税が賦課されているということになるという話です。

世代間問題に関する分析

それから 2 番目の問題が，世代間問題への倫理的な対処です。先ほど世代間のコモンズの問題は解決が難しいというお話をしましたが，難しいとは言っても管理はできる。どのような解決の方法があるのかというと，Otaki (2015) では遠い将来の世代まで考える必要はなく，直近の子どもの世代のことに関して割引率をきちんとゼロで考えられれば，それを連鎖的な形でつなげていくことによって，長期の最適化に至る可能性があるということを主張されました。従来は，長期的な問題，とくに世代間のコモンズの問題は難しいということを仰っていましたが，今お話ししたように，自分たちや自分の子ども，あるいは次の世代のことだけをきちんと考えるならば，それは長期の最適化においても大丈夫だと考えられるということです。

修正ラムゼー・ルールの導出

それから，従来はいろいろなモデルやシミュレーションなどにも負の外部性を入れて議論が行われていますが，一方で外部性の問題がないなかで割引率の問題を考えるというのはおかしいということで，一般的によく知られるラムゼー・ルール

$$\rho = r_t - \eta \frac{\dot{c_t}}{c_t}$$

（ただし, ρ は時間選好率, r_t は実質利子率, η は限界効用の弾力性, $\dot{c_t}/c_t$ は消費増加率）に，最適炭素税率（ψ^*）と，所得／資本比率（π_t）の積を入れ，

$$\rho = r_t - \psi^* \pi_t - \eta \frac{\dot{c_t}}{c_t}$$

式で示される，修正されたラムゼー・ルールというのを考えました（スライド 8 ; p. 29)。実際に，この式を用いて長期を想定したシミュレーションを行うとどのような結論に至るだろうか，という点に大瀧さんは興味がありました。我々の 2016 年の論文（Kuninori and Otaki, 2016）では，今後そういうことをする基礎を作りました。

それから，修正ラムゼー・ルールを定常状態のなかで考えた場合に，炭素価格との関連ではどのようになるのかということを，Otaki（2016a）にて洞察されました。そして，

$$p = \frac{1}{\beta(\alpha + \rho)}$$

式に表されるように，炭素価格 p の決定においては自然の炭素吸収率（α）とか，純粋な時間選好率（ρ），この 2 つが非常に重要な変数であるということを見つけられました（ただし，β は炭素原単位の逆数)。このことは，もし α が小さく（二酸化炭素が大気中で長期間留まることを意味する)，ρ も小さい（将来被害を割り引くことが少ない）ならば，p は大きくなることを示しています。

Otaki（2016b）では，外部性について消費のなかに入れるモデルと，生産に入れるモデルで，どのような違いがあるのかということも計算し，その結果も得られています（スライド9；p. 30）。

排出権取引 vs. 炭素税

また，温暖化対策における実際の経済的手段として，排出権取引と炭素税があるわけですが，これら二つの手段のどちらが望ましいのか，あるいはどちらが現実的なインプリケーションを持つのかということについて，大瀧さんは大変オリジナリティの高いモデルをつくられました（Otaki, 2013b ; 國則・大瀧，2014 ; Kuninori and Otaki, 2017）（スライド 10 ; p. 30）。通常，こうしたモデルにおいては先進国と途上国の存在を仮定しますが，我々のモデルでは，そうした先進国と途上国の組み合わせが n ペア存在するならば，という仮定を置きます。少し複雑ですが，この仮定に基づくと，実際に非常に現実的な解を得られるということで，そのようななかで，排出権価格と炭素税の議論をしています。結論としては，確かにユニバーサルな炭素税が一番望ましいものの，それは導入がなかなか難しいであろうから，排出権取引を今から少しずつ実施していくほうが，実は温暖化対策として有効かもしれないという，現実的なアイディアを示しています。その上でオフセット取引の具体的な手段であるCDM の評価も行っています。

まとめとなりますが，大瀧さんは，環境分野においても鋭い洞察力を持って取り組まれ，そのアイディアをどのように理論化するかということを，これらの研究を通じて私たちに教えてくれているのではないかと思います。したがって，私たちのように実証分析を行う者だけではなく，理論を専門とする研究者にも，環境経済学でどこまでできるのかということを知る上で，是非大瀧さんのお仕事を見ていただきたいと思います（スライド 11 ; p. 31）。

若い研究者への期待

大瀧さんは，枝葉末節的なところを超えて包括的な立場で議論されている部分もあって，そのあたりは本当に理論家だなと感じます。大瀧さんは環境経済学の分野でも非常に重要な部分の研究に取り組んでこられましたが，一方でまだ残された課題となっているところもあります。先ほど堀内先生から，Lexington Books の英語の著書がまもなく出版されるとご紹介がありましたが，本当はその後環境に関する論文をまとめて，英語の書籍も出そうと構想されていました。構想したといっても既にかなり書きためておられるので，すぐに実現したのではないかと思っております。その意味で改めて非常に残念に思いますが，大瀧さんの後を継いでこの分野の研究を推進していくということを，是非若い皆さんに取り組んでいただきたいと強く思います。理論の研究者も大瀧さんに是非続いていただきたいと思います。

実は宇沢先生も誰か環境をきちんと理論分析する若い研究者が出てくることを期待されていたと思います。大瀧さんは，その言葉に対して，結果的には呼応する形でご自身の問題として理論面から取り組まれ，本日紹介したような研究成果を上げられ，そして若い人にバトンを託されたと思います。本日はお話をする機会をいただき，どうもありがとうございました。

参考文献

大瀧雅之（1998）,「コモンズと異世代間の資源配分」『農業経済倫理学の構築：研究会の記録を中心とした論点整理』, 研究代表者 長谷部正（東北大学農学部）.

國則守生・大瀧雅之（2014）,「効果的な二酸化炭素排出抑制：排出権取引の実際と理論」間宮陽介・堀内行蔵・内山勝久［編］『日本経済：社会的共通資本と持続的発展』, 東京大学出版会, 235-257.

Kuninori, M. and M. Otaki (2016), "Modified Ramsey Rule, Optimal Carbon Tax and Economic Growth," *Atmospheric and Climate Sciences*, 6, 224-235.

Kuninori, M. and M. Otaki (2017), "A Theoretical Inquiry of the Offset Mechanism in Mitigating Global Warming: Economic Welfare Implications of the Clean Development Mechanism Investment," *Environment and Natural Resources Research,* 7(1), 76-81.

Otaki, M. (2013a), "Endogenous Social Discount Rate, Proportional Carbon Tax, and Sustainability: Do We Have the Right to Discount Future Generations' Utility?" *Environmental Systems Research*, 2:1, 1-8.

Otaki, M. (2013b), "Emission Trading or Proportional Carbon Tax: A Quest for More Efficacious Emission Control," *Environmental Systems Research*, 2:8, 1-6.

Otaki, M. (2015), "Local Altruism as an Environmental Ethic in CO2 Emissions Control," *Atmospheric and Climate Sciences*, 5, 433-440.

Otaki, M. (2016a), "Modified Ramsey Rule and Optimal Carbon Tax," *Atmospheric and Climate Sciences*, 6, 267-272.

Otaki, M. (2016b), "Properties of the Social Discount Rate and Intertemporal Negative Externality in the Utility or Production Function," *Low Carbon Economy*, 7, 47-53.

Pezzey, J. C. V. and M. A. Toman, eds. (2002), *The Economics of Sustainability*, Ashgate.

Pezzey, J. (1992), "Sustainability: An Interdisciplinary Guide," *Environmental Values*, 1(4), 321-362.

シンポジウム
「貨幣・雇用・リベラリズム：
大瀧雅之氏の研究を振り
返って」

環境経済学と持続可能性：
大瀧雅之さんの研究の軌跡

2018. 9. 6 (Thu.)
法政大学人間環境学部
國則守生

1

1．大瀧さんの印象

- 社会正義への情熱・関心
- 深い洞察と思考の持続力
- 理論家としてのセンス
- 実践力

2

2. 環境経済学の研究小史

[a] 大瀧（1998）.「コモンズと異世代間の資源配分」『農業経済学の展開とその応用：農の倫理への超学的アプローチ』

[b] 2001-02年. サステイナビリティに関する小研究会（大瀧さん・柳沼さん・堀内さん）

[c] Otaki（2013a）. “Endogenous Social Discount Rate, Proportional Carbon Tax, and Sustainability: Do We Have the Right to Discount Future Generation’s Utility?”

[d] Otaki（2013b）. “Emission Trading or Proportional Carbon Tax: A Quest for More Efficacious Emission Control”

[e] 國則・大瀧（2014）.「効果的な二酸化炭素排出抑制：排出権取引の実際と理論」間宮・堀内・内山編『日本経済：社会的共通資本と持続的発展』東京大学出版会

3

[f] 2014FY-17FY各秋学期「環境経済学の理論」（大学院講義）

[g] Otaki（2015）. “Local Altruism as an Environmental Ethic in CO2 Emissions Control”

[h] Kuninori & Otaki（2016）. “Modified Ramsey Rule, Optimal Carbon Tax and Economic Growth”

[i] Otaki（2016a）. “Modified Ramsey Rule and Optimal Carbon Tax”

[j] Otaki（2016b）. “Properties of the Social Discount Rate and Intertemporal Negative Externality in the Utility or Production Function”

[k] Kuninori & Otaki（2017）. “A Theoretical Inquiry of the Offset Mechanism in Mitigating Global Warming: Economic Welfare Implications of the Clean Development Mechanism Investment”

※論文の詳細情報については 25頁の参考文献を参照のこと

4

3. 各論概要

1）サステイナビリティを考える：**[b]**

- Pezzey, J.C.V. and Toman, M.A. eds. 2002. *The Economics of Sutainability*, AshgateのなかのPezzeyの2編を読む

- Pezzey, J. "Sustainability: An Interdisciplinary Guide," *Environmental Values* 1, 321-62
- Pezzey, J. "Sustainability Constraints versus "Optimality" versus Intertemporal Concern, and Axioms versus Data," Land Economics, 73, 448-66

5

2）CO_2などの環境問題の本質：外部性とダイナミックな問題

- 世代間のコモンズの問題：**[a]**
  - コモンズの管理は難しい
  - 後世代が前世代への抗議の不可能性

6

- 世代間の効用比較の枠組み（効用積分での取り組み）
  - ① 定常状態での割引率の性質：**[c]**
    - Pezzeyの意味でのサステイナビリティの条件のもとでの効用最大化を考える
    - 定常状態でゼロの割引率の意味⇔分権化経済で最適な炭素税が賦課されていること（cf. 根岸[1960]）
  - ② 世代間問題への倫理的対処：**[g]**
    - 直近の子供世代のことを考えるだけで長期の最適解に結びつく可能性を考察

7

- 外部性への対処
  - ① 最適成長論でのラムゼー・ルールの修正：**[h]**
    - 修正されたラムゼー・ルール

$$\rho = r_t - \psi^* \pi_t - \eta \frac{\dot{c}_t}{c_t}$$

ρ	：時間選好率	π_t	：所得／資本比率
r_t	：実質利子率	η	：限界効用の弾力性
ψ^*	：最適炭素税率	$\frac{\dot{c}_t}{c_t}$	：消費増加率

8

② 修正ラムゼー・ルールと炭素税：[i]

– 定常状態の炭素価格を算出

$$p = \frac{1}{\beta(\alpha + \rho)}$$

β：炭素原単位の逆数　α：自然の炭素吸収率

③ 消費外部性と生産外部性：[j]

9

3）環境に関わる経済的手段の評価：排出権取引と炭素税

① 排出権取引（オフセット取引）と炭素税：[d]

– 先進国および途上国を想定した2種類の*n*ペアからなる世界を提示
– そこで，排出権価格と炭素税を議論
– オフセット価格の維持の課題
– 現実的な政策の提言

② CDMの評価：[e] [k]

10

4. まとめ

- 鋭い洞察力を持った理論家
- 包括的な把握力を有されていた
- 環境経済学の分野でも残されたものは大きい

以上

11

講演 4

経験主義とリベラリズム――大瀧先生の思想について

加藤　晋
東京大学

大瀧先生と思想

私が大瀧先生と初めてお会いしたのは 2009 年なので，9 年前ということになります。今所属している社会科学研究所に助教として着任した際の懇親会のときに，大瀧先生にお声をかけていただいたのが初めての出会いということになります。当時，枕元に宇沢弘文先生の論文集を置いて寝る前に読む習慣があったので，大瀧先生が宇沢先生の一般均衡の論文に言及された際に，細かく私もポイントを覚えおり，話が盛り上がったのを覚えています。その後，夏頃の別の懇親会で，大瀧先生が夏目漱石の『野分』という作品についてお話をされていたときに，たまたま漱石を片っ端から読んでいたものですから，とても盛り上がり，勢いで朝まで話したような記憶があります。それからというもの，さまざまな古典的著作や論文について議論させていただく機会を持たせていただき，それが今年の 5 月まで続いていました。

こうした経緯もありますので，本日私がお話ししたいのは，大瀧先生の思想についてです。大瀧先生は，思想家として専門的な教育を受けたり訓練を受けられたりしたわけではないのですが，そのキャリアのなかでさまざまな人と出会い，交流し，本を読みながら，ご自身の思想を形成されていました。思想というものは，その人が他人の文章をどのように読むかに表れるとよく聞きます。このことを踏まえ，この場をお借りして，大瀧先生がどのように本を読みどのように解釈したのかということを通じて，大瀧先生の思想というものを描き出せないかと考えたわけです。

大瀧先生の思想の根幹にあるものは，人間は経験を積みながら変化していくものである，という考え方です。この考え方を今，私が述べたような形で表現すると至極当たり前のように感じられるかもしれません。しかし，経済学に限らず社会科学においては，人間の定常的な性質に注目する傾向があるため，こうしたことを明確に意識することはとても大事だと思います。カント，ルソー，ロールズ――こうした思想家は私の愛読書の著者なのですが，大瀧先生は，彼らは人間が経験を積みながら変化していくという側面を過小評価しているとお考えで，あまり好んでいませんでした。こうした著者たちの評価をめぐって，大瀧先生と私は大変多くの議論をさせていただいたのですが，いつも「加藤君，もう少し大人になって経験を積めば，そういった人たちの問題点に気づくようになるよ」と笑いながら話してく

ださいました。

大瀧先生の「実践的経験主義」

私がここで述べたいのは何かというと，人間が経験によって変化していくものという見方は，近代以降の思想家たちによって必ずしも常に重要視されているものではないということです。大瀧先生は，リベラリズムあるいはヒューマニズムの中核に，経験に基づく成長があるとお考えでした。大瀧先生のさまざまな著作から先生の読み方を眺めてみると，「実践的経験主義」と呼ぶべき思想的立場が浮かび上がってくることに気がつきました。このことを説明するために，大瀧先生がされた特徴的な読み方をいくつか挙げてみようと思います。

ジョージ・エドワード・ムーアの『倫理学原理』[1]は，若き日のケインズを熱狂させたことで知られていますが，大瀧先生はこの著作を 2010 年頃に読まれています。ムーアは，それまでの行為規範を分析する規範力学とは異なる方法論を仕立て，メタ倫理学という分野を切り開きました。メタ倫理学は，善，よいことの概念をはじめとする，倫理の言語的要素に注目します。ムーアは通常，理想的功利主義という立場で知られています。大瀧先生は，ムーアの主要な命題を，善は環境・歴史に依存して一意に定義できないという点に集約します。大瀧先生の好きなハンナ・アーレントの，人間は歴史に条件づけられているという命題がありますが[2]，まさにムーアは，それを倫理学というコンテクストで示したものとお考えでした。ムーアが，「人間の交流」と「美術的鑑賞」の 2 点に善の概念を集約していったことはよく知られていますが，通常はこの点をもって，ムーアが狭い理想主義の立場をとってしまったと考えてしまいます。大瀧先生はこれを，むしろ他者との交流と外部知覚による経験の積み重ねと見ています。つまり，善の概念が経験のなかで徐々に形成されていくものであるとお考えでした。ケインズは大瀧先生とは異なり，ムーアが人間生活のごく一部しか見ていないと述べていますが[3]，ケインズが若い頃にムーアに熱狂しながらも，一種のリアリストとして学術以外の場面で活躍できたのは，大瀧先生がお考えになっていたようなところがムーアにあったと見るべきなのかもしれません。

大瀧先生はムーアに加えてエドマンド・バークの著作を好んで読んでおられました。有名なフランス革命に関するバーク自身の著作だけでなく，最近のバークの伝記なども読まれていたようです[4]。バークは世間では，保守主義の祖として知られています。ハイエクが自身の反理性主義のパイオニアとしてバークを挙げているように[5]，バークは経験や歴史の重要性を訴えます。大瀧先生はさらに突っ込んだところにバークの重要性を見出します。例えば，「ゆっくりとした着実な進歩によって，それぞれの段階の効果が確認される」というバークの言葉を大瀧先生はあるところで引用しています[6]。大瀧先生は，このバークの言葉とムーアの善の考え方から，

「重要なのは長期的視野の下で，かつ個別具体的な問題を現実に沿って粘り強く対応す

ること」（大瀧他［編］，2015；161 頁）
という命題を導いています。私は，これは経験主義的人間像のもとで得ることができる，重要な政治経済的命題だと言うべきだと思います。

リベラリズムと多様性

大瀧先生の「実践的経験主義」はリベラリズムの問題と深く関わります。近年日本では保守であるということが奇妙に流行っていて，リベラルであるということが古くて流行遅れであるもののように語られることが多いように思います。政治的言論のなかでは，リベラルであることと社会主義や空想的平和主義であることが混同されています。特殊なコンテクストで用いられたリベラルという言葉に引っ張られて，本来のリベラリズムが軽視され，半ば踏みにじられているというような印象があります。しかし，大瀧先生と私，そして今飛行機でこちらに向かっていらっしゃる宇野重規先生もそうではないかと想像しますが，私たちは本当のリベラリズムをしっかりと理解して，個人と社会の関係を理解することが，デモクラシーにとって最も大事なことだと考えています。大瀧先生は，リベラリズム以上の政治的理念は存在しないと考えておられました。バークの著作は保守主義の古典ではなく，リベラリズムの古典的著作だと大瀧先生が述べられたことがあります。これは驚くべき命題ですが，大瀧先生の自由の考え方について考え直してみると，だんだん分かってきました。

この点についてさらにお話しさせていただきます。リベラリズムの中核となる主題は何かというと，寛容性です。寛容な社会とは多様性を持つ社会にほかなりません。大瀧先生はマックス・ウェーバーを念頭に置きながら，エトスの社会的意義を次のように説明しています。

> 「エトスを持った人間が存在すると，多様性を持つ社会が誕生します。既存の秩序・慣習に従って生きた人たちのなかにも，少なからず疎外感を持っていた人が潜在的に存在するからです。この人々は，違ったエトスを持つ集団に引き寄せられることで，より充実した人生を送ることができるようになります。こうして社会の多様性が生まれるのです」（大瀧，2018；202 頁）

エトスとは，集団や社会のなかの固有の考え方，思想・価値観を指します。例えば西洋とイスラムの対立などは，異なるエトス同士が危機や不安定性を社会に与えているような事例ですが，大瀧先生はむしろ，異なるエトスを持つ個人が相互に補完し合う可能性を指摘しています。ポイントは，エトスの異なる人々が対立を乗り越えて補完し合うことで，社会に多様性が生まれ，危機に対して頑強な社会ができるということだと思います。

実は，若き日に大瀧先生は，フランスが生んだ最大の人類学者であるレヴィ=ストロースの著書を愛用しておられました。社会科学研究所では，全所的プロジェクトという，分野や垣根を超えて議論する活動がありますが，現在行っているプロジェクトにおいてもレヴィ=ストロースはたくさんのヒントを与えてくれており，人類学という一分野を超えた影響力

があります。とくに大瀧先生が影響を受けた作品は『はるかなる視線』というエッセイ集です。大瀧先生がこの本を私に貸してくださったので，私は本のなかで大瀧先生が下線を引いた部分をたどることができます。大瀧先生は，大変多くの下線を引いているわけではなく，ほんの数か所なので，下線があるところは極めて重要だと大瀧先生がお考えになったところだと思いますが，次の多様性に関する部分に大瀧先生は下線を引いています。

> 「文化がそれぞれ多様だと自認すれば，他の文化を意図的に無視することもできるし，お互いに対話の相手として認め合うこともできる。どちらの場合にも，異文化は相互に脅威であり，ときに戦うこともあるが，双方の存在そのものを窮地に陥れることはけっしてない。だが，双方が認めた多様性の概念が，一方の極で力関係にもとづく優越感に変わり，文化相互の多様性が肯定的または否定的な形で認められていたのが，文化のあいだに不均等があるという断定に変わると，状況は一変する」（レヴィ=ストロース，2006；9 頁）

これを読むと，多様性が重要なものだということが見てとれます。西洋とイスラムの対立のような危機的状況は，力関係に基づく優越感と結びついている状態と言えます。まずは我々自身，社会が多様であること，それ自体を認めることが大事です。それと同時に，開かれた精神を持つことが重要です。さらに大瀧先生は，同じ作品に含まれる別の章の次の部分にも印をつけています。

> 「互いに並列して，孤立状態で生きようとする家族は，それぞれが閉鎖的な集団を形成し，自家存続を余儀なくされ，必然的に，無知，恐怖，そして憎悪に蝕まれる」（前掲書，79 頁）

孤立状態が閉鎖性を生んで社会を危機にさらすことは，アーレントも述べています[7]。異なるエトスを持つ集団が開かれた形で結びつくことが社会を多様にし，安定したものへと導くのではないかと大瀧先生は考えておられたのではないでしょうか。

大瀧先生が考える「自由」

大瀧先生が最も読まれたハイエクの著書が『自由の条件』[8]だと思います。この作品は，『隷属への道』からさらに思想的広がりを見せたハイエク中期の作品です[9]。ハイエクは現在，新自由主義という考え方を主張する人たちに教祖のように信仰されていますが，実際のハイエクは決して新自由主義のような考え方を主張していません。ハイエクにとって最も大事なものは，彼が「自発的秩序」と呼ぶものであり，それは個人の経験に基づいた慣習です。ハイエクは個人の自由を重視します。自由の概念はとても複雑で，思想家の間で捉え方が異なります。ハイエクは相手に介入されないことこそが自由の本質だと考えていると，現在の多くの思想家が見ています。しかし大瀧先生は異なる読みをされます。大瀧先生は次のように述べています。

> 「みなさんは，「自由」とは何をしても勝手であることを意味すると，考える

かもしれません。しかしこの考え方は，誤りです」（大瀧，2018；178 頁）

この見方は，夏目漱石が『私の個人主義』のなかで述べた自由に近いものですが，大瀧先生はむしろハイエクの自由をこのような考え方と結びつけています。

「反社会的な行為を拒否するという良識あるいは常識を社会の共通理解としたうえで，個人の望む行動や言動がなされる必要があることが分かります。ハイエクが提示した「自発的秩序」に基づく「自由」とは，そうしたものであると，私は解釈します」（大瀧，2018；178-179 頁）

人々は歴史に条件づけられている以上，過去の経験や習慣に影響を受けます。経験や習慣のなかで身につくのは常識や良識であって，こうしたものに影響を受けながら，人間は自由に意思決定をすると考えれば整合的なのかもしれません。

改めてレヴィ=ストロースの『はるかなる視線』を開いて，大瀧先生が下線を引いているところをもう一つだけ追ってみると，次のような文章が見つかります。

「自由が拘束を退け，克服するものであれば，そして，拘束に欠陥や弱点があって，創造をさそうのであれば，自由と拘束は対立しているのではなく支え合っていることになる。自由は障害を拒否し，教育，社会生活，芸術の開花は自発性の全能への信仰なしにあり得ないとする現代の幻想，今日の西欧の危機の原因ではないにしても，その重要な側面と考えられる幻想を払拭できるのは，自由と拘束のこの関係以外にはない」（レヴィ=ストロース，2006；xi 頁）

我々は結局のところ，歴史や経験，そしてそこから生じる慣習や習慣に拘束されます。それらと自由を対立的に捉えるべきでないというのが，ここで述べられているところだと思います。こうした自由のあり方の上に，安定した社会が構成されるという考えは，大瀧先生の自由思想の根幹だと思います。

正しい「思想」が持つ力

本日は，「実践的経験主義」と「社会的多様性」という考え方を中心にして，私の思うところの大瀧先生の思想について話させていただきました。今，私が話しているのは，大瀧先生の思想ということになりますから，大瀧先生が何十年も取り組まれたケインズの『一般理論』（『雇用，利子および貨幣の一般理論』）の有名な最後の言葉を引用しないわけにはいきません。こちらは，大瀧先生ご自身の翻訳によるものです。

「既得権益の存在は，思想の徐々たる浸透に比し強調され過ぎている。経済・政治哲学の分野において 25 から 30 を過ぎた者で新しい思想の影響を受けるものは決して多くはない。そうしたわけで，官僚・政治家あるいは煽動家でさえも現実を理解するツールは最新のものではない。しかし，良きにつけ悪しきにつけ，早晩問題となるのは既得権益ではなく，思想である」（Keynes, 2012; 383-384 頁，大瀧・加藤［編］，2017；131 頁における大瀧氏の翻訳）

もちろん，近年のリベラリズムの軽視であるとか保守の流行というのも，こうした思想の徐々たる浸透の効果です。

社会を軽視させるような思想の浸透こそが大瀧先生が懸念されていたことだと思います。懸念することはとても大事ですが，一方で極端な悲観主義に陥ることはないと思います。ケインズが「思想というものは，それが正しいとすれば，時代を超えた力を持つ[10]」と述べていますが，人間は多くの間違いや失敗をしながらも正しいことを認識する能力が本来備わっていると思います。大瀧先生が 60 年の経験の流れのなかで考えてこられたさまざまな思想は，時代を超えた力を持っているはずです。これから私たちのすべきことは，多様性を認めるリベラルな社会を形づくって，正しい思想をきちんと認める環境を整えることだと思います。この点を最後の主張として，私の講演を終わります。

注

[1] Moore, G. E. (1903), *Principia Ethica*. Cambridge: Cambridge University Press.

[2] これはマルクス主義的な「人間が〈歴史〉つくる」という命題に対する強力な批判であるが，その内容については次の著書を参照されたい。Arendt, H. [1958] (1998), *The Human Condition* (Second ed.). University of Chicago Press.

[3] Keynes, J. M. [1938] (1978), My Early Beliefs. In E. Johnson & D. Moggridge (Eds.), *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, 433-451, Royal Economic Society.

[4] たとえば，次のものが挙げられる。

Norman, J. (2013), *Edmund Burke: The First Conservative*. New York: Basic Books.

著者はイギリスの政治家であるが，大瀧先生はその事実にも触れられ，このノーマンによる伝記を高く評価していた。

[5] Hayek, F. (1948), *Individualism and Economic Order*. Chicago: The University of Chicago Press.

[6] 大瀧他［編］(2015）の 161 頁の脚注 15 を参照されたい。バークの著書の該当箇所は次の本の 173 頁である。Burke, E. [1790] (1987), *Reflections on the Revolution in France*. Buffalo, NY: Prometheus Books.

[7] アーレントによる下記の本の最終章を参照されたい。

Arendt, H. (1951), *The Origins of Totalitarianism*. Berlin: Schocken Books.

[8] Hayek, F. (1960), *The Constitution of Liberty*. Chicago: The University of Chicago Press.

[9] Hayek, F. (1944), *The Road to Serfdom*. Chicago: The University of Chicago Press.

[10] Keynes (2012).

参考文献

大瀧雅之・宇野重規・加藤晋［編］(2015)，『社会科学における善と正義』，東京大学出版会.

大瀧雅之・加藤晋［編］(2017)，『ケインズとその時代を読む――危機の時代の経済学ブックガイド』，東京大学出版会.

大瀧雅之（2018)，『経済学』(アカデミックナビ)，勁草書房.

レヴィ=ストロース，クロード（三保元［訳］）(2006)，『はるかなる視線 1』，みすず書房.

Keynes, J. M. (2012), *The General Theory of Employment, Interest and Money*, The Collected Writings of John Maynard Keynes VII, Cambridge University Press.

シンポジウム「雇用・貨幣・リベラリズム：大瀧雅之氏の研究を振り返って」

パネルディスカッション

テーマ	大瀧雅之氏の研究の足跡をたどる	
パネリスト	堀内 昭義	東京大学名誉教授
	間宮 陽介	青山学院大学総合文化政策学研究科特任教授 京都大学名誉教授
	國則 守生	法政大学人間環境学部教授
	竹下 啓介	一橋大学大学院法学研究科准教授
	田村 正興	名古屋商科大学ビジネススクール専任講師
モデレーター	加藤　晋	東京大学社会科学研究所准教授

パネルディスカッション

大瀧雅之氏の研究の足跡をたどる

堀内 昭義　間宮 陽介
國則 守生　竹下 啓介
田村 正興　加藤 晋

加藤　それではパネルディスカッションを始めさせていただきます。

ここでは，先ほどの講演を踏まえつつ，より広く，個人的なエピソードなどを交えながら，日本経済や社会科学のあり方など，大瀧先生が関心を持たれた問題について，いろいろと討論できればと思っています。

先ほどの講演の登壇者に加えて，間宮先生と竹下先生にもご参加いただきます。お二人にはそれぞれ 5 分ほどで，エピソードなどもいれながら，大瀧先生の学術的貢献・知的貢献等をまとめていただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

間宮　間宮でございます。大瀧さんとはともに神奈川大学に勤務していたとき以来，33 年のつき合いになると思います。ただ，つき合いといっても，学問上のつき合いというよりは，夕方 5 時頃からつき合うことが多くて（一同笑)。4，5 年前にも町田で――私は小田急線沿いに住んでおり，大瀧さんは八王子経由で自宅に帰るということで，ちょうど二人とも交通の便がいいところなのですが，その町田で徹夜して，朝一番で帰ったことがあります。そのようなつき合いがずっと続いていました。

今「大瀧さん」と言いましたけれども，「大瀧君」と言ったほうがずっといい。そのほうが悪口も言いやすいし（一同笑)。私が 30 代の頃には，大瀧君から毎日のように自宅に電話があり，子どもたちが電話口に出ていたのですが，すっかりなついて，大瀧君のことを「おたっきー」と呼ぶんですよ（一同笑)。「お父さん，おたっきーから電話だよ」なんて，恐れ多くも言っていました。そのような関係がずっと続いていました。

今日，何をお話ししようかと思ったのですが，彼は理論経済学者ですから数学と，それから私はどちらかといえば文学的なので，数学と文学について，数分でお話ししようと思います。

大瀧君との研究上の接点

間宮　私は「文学」を数学以外という意味で使うので，当然狭い意味での文学だけではなく思想，哲学も入ります。ですから私にとっては，数学という集合の補集合が「文学」にあた

り，本来，集合と補集合の共通部分はないはずなのですけれども，不思議なことにこの 5 年間に，大瀧君と同じ本あるいは雑誌で名を連ねることが 4 回ありました。それ以前には全く無かったことでしたので，彼が亡くなった今考えると，何か神様がそうした配剤をしたのかなというようにも考えてしまいます（スライド 2, 3；pp. 53-54）。

公表年が早いほうから順に紹介すると，一つは『日本経済――社会的共通資本と持続的発展』（東京大学出版会，2014 年）です。大瀧君が書いたのは，先ほど國則さんが紹介した環境についての問題ですが，このとき私は，この本のなかで「漁場の共同利用と自治的管理」について，数学とは全く違う文学的な文章を書きました。

また，今ご紹介した本は宇沢弘文先生が亡くなった 9 月に出ましたが，その後宇沢先生を追悼する『現代思想』（青土社）の臨時増刊号が 2015 年 3 月に出ました。『現代思想』という雑誌は，フランスの現代思想とか，いわば流行の思想を取り上げている雑誌なのですが，この本のなかに，宇沢つながりということで，大瀧さんも私も書きました。本が出る前に大瀧さんから原稿を送ってもらったのですが，それを見ると微分方程式が書いてあるのです。『現代思想』に微分方程式が入るなどというのは前代未聞だと思います。ちなみに宇沢先生も，私が学生の頃，日経新聞で連載した「やさしい経済学」のなかで微分方程式を使ったことがあります。そのときに，「やさしい経済学」で微分方程式を使ったのは宇沢が初めてだなどと言われていましたが，『現代思想』でも微分方程式を使ったのは大瀧君が初めてだろうと思います。ただ，本になってみると，これが非常にうまくおさまっている。宇沢先生といえば，よく知らない人にとってはとくに成田闘争とか社会的共通資本ということがすぐ念頭に浮かぶわけで，理論経済学者としての宇沢先生のことはあまりよく知られていません。そこへ大瀧君はペンローズ曲線と投資関数に関する宇沢先生の論文を紹介する形で寄稿しました。これが全体として非常によくおさまっていて，バランス感覚があるなと感じました。

それから 3 番目が，大瀧さん，宇野さん，加藤さんが編者になった『社会科学における善と正義』（東京大学出版会，2015 年）です。大瀧君から電話があり，今度こうしたことをやるから何か書いてくれと言うので，私は分かりました，と言って引き受けました。私は執筆依頼を受けたときには，どういう趣旨かと問うて，やっぱりそれでは書かない，ということは言いません。引き受けた後で，どんな本なのかということを考えます。2015 年に刊行されましたが，2012 年の秋に執筆予定者が集まり，自分の書きたいことを報告する会がありました。何に驚かされたかというと，私の予想とは全然違って，ロールズとか功利主義とかムーアとか，加藤さんが先ほどお話になったようなことをみんなで話し合っているのです。そのなかには，京都大学の児玉聡さんという優れた倫理学者がいましたが，彼と功利主義をめぐって大瀧君が論戦するのを聞いていて，大瀧君という人は数理だけではなくて文学的な裾野が広いのだなと思いました。論文自体は，確か序論から始まって進化ゲームみたいなところで終わっているのですが，これは誰かもっと続けると面白いなと思いました。

最後，4 番目が社研（社会科学研究所）のニューズレター（Social Science Japan Newsletter, 2018 年 3 月）に書いたものです。これは大瀧君が責任編者としてまとめたものだと思います。書き手を見ると，私がよく知っている設研（設備投資研究所）関係者が多く，堀内（昭義）さんや神藤さん，私と大瀧君などが書いていて，まるで設研のニューズレターみたいな感じになっています。

以上 4 つの本・雑誌で彼と一緒に名を連ねたわけですが，とくに 4 つ目の論文における「ケインズは第 2 公準を棄却したのか，それとも拡張したのか」という問題の立て方と解き方は，今までの大瀧君にはない，何か成熟を感じさせる部分があり，ものすごく感心しました。つい最近，また読んでみたのですけれども，成熟を感じました。

期待された大瀧君の将来

間宮　もう時間がありませんが，最後に大瀧君のたどった経済学者としての軌跡を見てみると，ふと想起されたのが中島敦の『名人伝』に出てくる紀昌という若者のことです（**スライド 5；p. 55**）。紀昌は血気盛んな若者で，弓の名人になろうと思い，まず都に住んでいる人に弓を習う。数年習った結果，百発百中，的を射ることができるようになり，それどころか，100 歩先に髪の毛にシラミをつるして，それを目がけて弓を放つと，シラミの心臓まで射貫くようになる……。それくらい，弓の腕がもうこれでパーフェクトではないかというところまでいく。しかし，これではまだ不満で，紀昌は山に入ります。そこには仙人みたいなウルトラ達人が暮らしており，不射の射といって，弓をとらずに，射る真似をすると，鳥がばらばらと落ちてくる。この老人は，それくらいの域に達した人でした。紀昌は石の上にも 9 年，やっと故郷へ帰り，そのときには髭ぼうぼうになっているのですが，噂を聞きつけてやって来た人から「ひとつ，今すぐ射てほしい」と頼まれるのですが，弓の存在さえ知らない，弓矢の名前すら知らない……そういった域にまで達したという話です。

私が思うのは，大瀧君があと 20 年，少なくとも 10 年間生きていたら，一体どれだけのものになっただろうなということです。息をすればモデルがつくれるような，そういった名人クラスになっていると僕は思うのですが，さらにそこから 10 年生きていたらどうなるだろうか，ある意味での文学との接近というのが図られるのではないか……。先ほど加藤さんが言われたバークとかアーレントとかムーアとか，そういった思想家をいかに取り上げるかという，そうした接近も考えられないわけではないですけれども，先ほどのニューズレターの論文をみると，問題の立て方自体が非常に哲学的であり，追究的で求心的という感じがする。しかもそれを，華々しい数学などは使わず，高校生でも分かる程度の数学やグラフを用いて，非常に簡潔な形で書いている。高校生に分かるように書くとなると，言葉の説明からしなければならないので，通常はくだくだしくなってしまう。ところが大瀧君の論文は非常に簡潔で，英語としても素晴らしいと思いました。ひょっとしたら日本語よりも英語のほうが上手いのではないかというような気もしたくらいです。大瀧君は血気盛んな人ですから

感情が表に出てしまいます。とくに誰かのことを批判する場合には，感情が非常に出やすい。何か日本語として，おかしくなることがあります。決して日本語が下手だといっているわけではない。英語の場合はそうした感情がほとんど出ずに，英語の流儀に従う非常に淡々としたいい文章になっているという気がしました。大瀧君があと 10 年，20 年生きていたらどんな人になっただろうなと思うと残念ではありますが，空想する楽しみというのも私にはあるのです。以上で終わります。

社会科学者・社会思想家としての大瀧先生

竹下　一橋大学の竹下と申します。本日この場には経済学がご専門の先生方が多数かと思いますので，少し自己紹介をさせていただきますと，私は国際私法という法律学を勉強しております。大瀧先生との出会いは，おそらくこのなかの誰よりも遅く，2016 年の 6 月頃から 2 年間程度のおつき合いしかございませんが，間宮先生も仰っていた午後 5 時以降のおつき合いの形で，大瀧先生から直々のレクチャーを受け，さまざま勉強させていただきました。

私は国際私法という国際結婚や国際的な商取引の研究をしていますが，そのなかでもとくに，法律学におけるお金の本質が何であるのかということについて関心を持ち，研究しております。そうしたなか，本当に偶然なのですが，大瀧先生と「貨幣」について――私の観点から言うと「法貨」Legal Tender について議論するようになった次第です。

私にここで期待されているのは，社会科学者としての大瀧先生についてお話しするということではないかと思いますが，仮に「大瀧先生と法学」というテーマで話すとすると，私にとっては耳が痛いお話となります。大瀧先生からは「法学者というのは常に言語障壁に守られているよね。専門的な用語で小難しい議論だけをして，全然分かりやすく説明していないじゃないか」と常々ご批判いただいておりました。先ほど間宮先生が，大瀧先生がご自身の研究の本質を非常に簡潔に表現されていたと仰っていましたが，そういったところも，こうした先生のご批判とつながっていたのではないかと考えています。

経済学のご業績のなかからいくつか大瀧先生の言葉を拾い上げ，社会思想家ないしは社会科学者としての大瀧先生を捉えてみると，非常に私の分野とも関係してくる部分があります。国際私法の研究者は，国際結婚や国際商取引は拡大・促進する方向が望ましいということを，ある意味自明の前提にして研究しています。しかし，それが果たして本当なのかという点は，私も研究者として常々疑問に思っていたところでした。この点について大瀧先生は，ご著書のなかで過剰なグローバリズムに対する批判を展開されており，専門を異とする私にとっても，いろいろと教えられるところがあります。大瀧先生があと 10 年研究を続けておられたら，社会思想家としてのご業績も出てきたのではないかと思います。

あまり長くならないようにしますが，1 点だけ，大瀧先生のお言葉として私がグローバリゼーションという観点から紹介したいのが，『貨幣・雇用理論の基礎』（勁草書房，2015 年）

のなかで大瀧先生が仰っているお言葉です。それは「愛国者であって初めて人間的なコスモポリタンになれる」というお言葉。これはある意味で，現在の国際社会の問題を解決する一つの重要なキーワードなのではと思います。『世界法の理論』（岩波書店，1932 年）を書かれた田中耕太郎先生は，私の専門分野において非常に高名な，優れた研究者ですが，その主張を理解できる一方で，単純なコスモポリタニズムが果たして現在の国際社会において通用するのか，場合によっては，それがむしろ特定の考え方以外を排斥する排外主義に至るのではないかという懸念も残ります。本日お配りいただいた冊子にもある「我が心は石にあらず」というエッセイのなかで（付録；p. 93），大瀧先生はレヴィ=ストロースを引用し，「共存のためには適当な距離が不可欠である」としています。こうした部分にも大瀧先生の国際観，国際社会においてどのようにして秩序を構築していくべきかに関する関心が表れているのではないかなと思われます。

惜しむらくは，やはりこうしたグローバリゼーションに対する先生の思想自体を，本や論文の形で体系的に読むことができないことです。大変残念ですが，この点については先生のご業績の文言一つひとつを丹念にたどることによって，若い我々が先生の思考を再構築し，さらには先生の手法を批判的に検証し，学問として発展させていかなければならないのではと考えているところです。

長くなり申し訳ございませんでした。以上で私からのコメントを終わらせていただきます。

大瀧先生と宇沢先生

加藤　愛国者——パトリオットの話は，実は大瀧先生もさまざまな場面で言及されています。背景には，当時激しく論争をしていたケインズやピグー，ロビンズといったイギリスの経済学者たちがパトリオットであるということに関しては共通で，第二次世界大戦が始まるやいなや，一気に組んで協力し合ったことがあります。また，まさにケインズは，第二次世界大戦をどのように解決していくかということを考えていたりしたので，大瀧先生はそういったコンテクストのなかで，パトリオットについて考えたのではないかと思いました。その他個人的には，パトリオットとナショナリストでは，それぞれどう違うのかという点も気になりますが，まだこのパネルディスカッションでお話ししたいことはたくさんあるので，今回は少し脇に置いておきます。

さてそのお話ししたいことは何かというと，まず宇沢弘文先生に関してです。前半の講演のなかでも，宇沢先生のお名前が何度も出てきましたが，大瀧先生と宇沢先生の関係について，堀内先生，ご発言をいただけますか。

堀内　宇沢先生と大瀧さんとの関係というよりも，宇沢先生がやろうと思ってできなかったことと大瀧さんのそれに対する貢献ついてお話ししたいと思います。宇沢先生はもとも

と新古典派的なアプローチで経済の世界を構築する，つまり抽象的に，論理的な整合性が成り立つような世界として新古典派的な世界をつくり上げるということに努力してこられました。その分野の業績では非常に大きな業績を挙げられたと言えます。そのなかで当然，ルーカスなどの議論に触れるようになるわけですが，宇沢先生自身は，ルーカスの議論――簡単に言ってしまえば新古典派的な貨幣数量説が成り立つ世界を論理的に証明できるという点について，直感的に疑問を持たれました。宇沢先生は御自身が積みあげてきた新古典派モデルから脱却することを，ルーカスのモデルを批判することによってなしとげたいと考えておられたのだと思います。設備投資研究所や東京大学のセミナーなどでも，何度もルーカスの仮説に立って，彼と違う結論が出てくるということを論証しようとしましたが，結局，宇沢先生自身はそれに成功しませんでした。「やっぱりルーカスは正しいみたいだね」と宇沢先生が最後につぶやく形でセミナーが終わるということが何度もあったのであります。

そうした点から申しますと，宇沢さんの努力をいわば踏襲した形でルーカス・タイプの議論を乗り越える新しい理論をつくりあげた大瀧君の学問的な意味でのセンスのよさというのは，他のいろいろな彼自身の学問的努力を超えて，非常に大きな業績であったと思わざるを得ません。あまり学問的に慣れていない人たちからは「せいぜいちょっとした仮定の違いで，たいしたものではないのでは」と言われるかもしれませんが，アカデミズムの理論的な部分というのは，そういうところでいわば「仕事」をするわけです。大瀧君はそういうところで非常に大きな仕事をし，生きていれば，やがて非常に大きな成果を上げた人物として崇められる……崇められると言ったら少し語弊がありますが，宇沢弘文先生を超えるような業績を上げられる人物として成功しただろうと私自身は考えています。

若き日の大瀧先生

加藤　もう一つ，僕は聞いてみたいことがあります。今日お配りした冊子のなかに大瀧先生ご自身がお書きになった文章が入っています。これは大瀧先生が『経済セミナー』に書かれたエッセイで，ご自身でもとくに気に入っていた文章です（付録；p. 93）。「青春奮闘記」というタイトルで，大瀧先生が学生時代にどのように勉強し，苦労しつつ闘ってきたのか，ということが書かれています。ここにいらっしゃる堀内先生，間宮先生，柳沼先生も含めて，いろいろな方のお名前も登場します。ただ，田村さんや僕などのある種新参者にとっては，若き日の大瀧先生の姿というのが全く想像つきません。もちろん，このような文章などを読んで「ああ，そうだったのかな」と思いをめぐらせることはありますが，「青春奮闘記」のなかでは，ご謙遜なのか，すごく苦労されたというようなことが書かれていて，間宮先生のところでよく泣いたとか，そういった話まで書いてあります。本当にそんな感じだったのか，若き日の大瀧先生はどんな感じだったのだろうかということが私自身は気になるのですが。

間宮　お酒を飲んでいるときにだんだん感情が高ぶってきて泣くということはありました。

泣くという行為は，感情がパッと穏やかになるのでよいことなのですが，悪いのは彼が人をけなし始めるときです。例えば，浅子さん……（一同笑）。彼をけなすときは，ため口をきくような，けなし方です。ときにとげとげしいけなし方をする場合もあり，こうした場合には少し用心したほうがいいなと思っていました。

用心したほうがいいなというのは，皆さんご承知かもしれませんが，いわば私のような凡人と違い，彼は若いときから，生きる・死ぬの境目にいた気がするのです。神奈川大学に来てから 3 年くらいは落ち込んだ状態で，入院もしました。そのとき法人の理事会は「大学を辞めさせろ」というようなことを言ったらしいのですが，当時経済学部の学部長だった冨岡（倍雄）先生という方――この方は，全学連の伝説的な人物でしたが，彼が「何でそんなことを言ってくるんだ」と食ってかかり，抵抗した。それ以来大瀧君は，冨岡さんが亡くなってからも毎年ご自宅に伺っていた。自分を庇う人に対しては律儀なところがありました。言葉遣いからして律儀で，二重三重に尊敬語を使う，そのくらい律儀なところもありました。

だから「我が心は石にあらず」という彼の「青春奮闘記」――「我が心は石にあらず」というのは高橋和巳の作品名から取ったもので，この文章のなかでもご本人が「青臭く気恥ずかしい限りだが」と書いています。確かに青臭い感じがありますよね。青臭いけれども，その青臭さがどうなっていくのか……。あと 10 年，20 年生きていたら，青臭さが取れて熟成して，今までとは違った大瀧君になったのではないかなという気がしています。

大瀧先生の学生時代・設研での様子

加藤　堀内先生，大瀧先生はどういう学生だったのでしょうか。

堀内　まあ，非常に困った学生だったと（一同笑）。これは間宮さんからもご説明がありましたが，それと同時に学問に対しては非常に熱心で，なかには言いかけたけれども全然物にならないような議論もありましたが，いろいろな議論を活発に組み立てていました。でもそれが結局，長い目で見れば非常に大きなプラスになったということです。宇沢先生との関係もそうですが，彼の臆せぬ態度がいろいろな研究成果を上げることにつながったということですね。だから，恥ずかしがったりするのはよくないということなのでしょう。大瀧君があえてはっきりと態度・意見を示していたことは，非常に良いことであったのです。

加藤　ありがとうございました。今度は國則先生に伺いたいのですが，設研（設備投資研究所）での若いときの様子はどのようなものでしたでしょうか。追悼文を寄稿してくださった堀内行蔵先生の文章（付録；p. 77）にも，設研での様子は書いてありましたが，國則先生はどのようなことが印象に残ったのでしょうか。

國則　大瀧さんが大学院生で設研の嘱託だった頃の話は，この後柳沼先生からいろいろ話

していただけると思います。多分，大瀧さんが若いときに設研で一番つき合いがあったのが，柳沼さんと堀内行蔵さんだと思います。私が大瀧さんとよくつき合うようになったのは，1980 年代の半ば頃からですが，そのつき合いというのは夜のほうが長くて……（一同笑）。懇親会も終わりかけてそろそろ帰ろうかなと思うと，「もう一軒」と頼んでくる……。柳沼さんもそうなのですが……（一同笑）。大瀧さんはずっと議論を続ける形で，きちんと話が終わるまでは帰してくれないという感じでした。ただ，そういった機会を通じて大瀧さんの考え方もわかるようになり，昼にもいろいろなことを話すようになりました。「これはどのように考えればよいのでしょうか」と真面目に聞くと，翌日などに「このように考えてきたのですが，いかがでしょうか」と打ち返してくださいました。そうした形で本当によい機会をいただきました。

大瀧先生の研究スタイル

竹下　田村先生にお伺いするのが一番よいかなと思うのですが，今日先生方に是非伺いたいことがあります。私は経済学については素人ですが，よくよく頑張って読むと，大瀧先生のものは読めなくもありません。これは何故かと考えたときに，大瀧先生の論文や思想の鍵となるような発想に，すごくシンプルな，研究の要になるような視点があるように感じました。大瀧先生はご著書『貨幣・雇用理論の基礎』の冒頭で，『星の王子さま』から「ほら，僕の秘密。これはいとも単純なものだよ。心で見ない限り，物事はよく見えない。物事の本質は目では見えない」という一節を引用しておられます。私のような素人目には，大瀧先生は「心で見る」というか，非常にシンプルで本当は誰しもが気づくかもしれない点を，視点を変えてしっかりと深く研究することにより，さまざまな業績を得てきた方のように思えます。こうした印象は，経済学がご専門の先生方の目から見て正しいでしょうか。もしそうだとすれば，私も法学で，そういった視点で頑張ってみようかなと思っている次第なのですが，いかがでしょうか。

田村　私も今日，大瀧先生の思想に関する間宮先生や加藤先生のお話などを伺って，竹下先生がそのように仰るのもよく分かる気がします。経済学者にはいろいろな研究スタイルがあり，例えば現実にある面白い経済事象を説明するモデルをつくる人，既存の経済モデルに説明力を与えたり，何か要素を加えたりして，モデルをつくろうとする人などがいる。そうしたなかで，大瀧先生は，ある種経済学者としては珍しく，どちらかというと思想から出発しているのではないかと思います。自らの思想を表現する手段が経済モデルだったのではないかなと。

今，思い出を掘り返してみますと，例えば私が学生のときに，大瀧先生の嫌いな新古典派のマクロ経済学――リアルビジネスサイクルについて議論になったことがありました。リアルビジネスサイクルは，景気の変動を説明する理論ですが，そのときに TFP――生産性の

部分が予測できないと，結局将来の予測ができないから意味がないのではないかと，確か僕が申し上げたのですが，大瀧先生は「それは確かなんだけど，そもそも予測をすること自体に意味がないと自分は思う」と言うのです。それで，大昔にジェボンズが唱えた太陽黒点の動きによって景気が変動するという説があるのですが，「それだったら，例えば黒点で景気が変わる。それで経済が説明できるとして，君は満足なのか。それでいいのか」と聞かれたので，私が「いや，説明できるのだったら，サイエンスだからいいのではないですか」と言うと，「それでは考えが合わない」ということで，研究室がすごく重い雰囲気になりました（一同笑）。何を言っているかというと，大瀧先生にとって重要なのは，現実を予想・描写できるということではなく，やはりモラルや思想を表現する手段として，経済学を考えていたのではないかということです。ですから竹下先生が仰るように，すごくシンプルなものから始まっているような気がします。竹下先生のご指摘はおそらく正しいのではないか，大瀧先生は思想ないしはモラルのところを捉えて研究をされていたのではないかと僕は思います。

一つ付け加えるとすると，大瀧先生は近年，勁草書房や有斐閣アルマなどから教科書も出版されていらっしゃるのですが，これらのなかではモデルの話だけではなく，思想的なバックグラウンドについてもきちんと書かれています。例えば先ほどご紹介があったような，ハイエクやバークの思想についての紹介とあわせてモデルの話をされています。そういう意味でも，大瀧先生はモラル，思想の経済学者と言えるとも思います。

古典派の「第２公準」をめぐって

間宮　例えば貨幣の中立性に関する議論においては，その出発点に「貨幣は中立的でない」という考えが大瀧君のなかにあるわけです。私のなかにもその考えはあるのですが，私の場合は「そんなの中立的でないのは当たり前だ」と思うので，その先へ進む気がしないのですが，大瀧君の場合は突っ込んでいく。スライド中に示した労働供給に関するグラフをご覧ください（**スライド４；p. 54**）。古典派の２つの公準というものがあります。第１公準は，労働需要関数を導くための企業の利潤最大化の条件，第２公準は，労働者の労働供給曲線を導くための条件であり，二つの曲線が交わるところで労働市場での均衡賃金率が決まります。古典派理論では，例えば 1,000 人中 80 人しか働いていなくても，残りの労働者は自ら自発的に働いていないのだから問題ではないとされていました。

それに対しケインズは，そんなことはない，と言います。例えば，実質賃金は「物価水準」で割った「賃金」ですから，物価水準が上がると実質賃金が下がることとなります。ケインズは「ちょっと実質賃金が下がっただけで労働を撤収するなんてことがあるわけない」という，ごく当たり前のところから出発するわけです。そうして『一般理論』（『雇用，利子および貨幣の一般理論』）において「非自発的失業」という概念を打ち出し，第２公準，労働者の労働供給の条件を批判しました。Otaki（2018）における大瀧君の出発点というのは「ケイ

ンズはこの第 2 公準を果たして棄却したのか，いや単に拡張しただけではないか」という疑問であり，

$$L^s = \left\{ N \middle| \frac{w}{p} \geq \frac{d\varphi(N)}{dN} \right\}$$

式において，不等号の部分がイコールとなるのが第 2 公準ですが，労働の限界不効用，すなわち 1 時間働いたときの不効用よりも，得られる賃金のほうが多ければそれはそれでよいと考えたのです。そして，右上がりの労働の供給曲線の代わりに斜め線を引いたところ――Feasible Set という形で，非自発的な失業をかなりケインズに近い形で出すことができた。こうして，大瀧君が新古典派的なケインズ批判を批判するわけです。その突き詰め方の基盤には，ケインズと同じ「労働者がそんなことをするはずがないじゃないか」という一種の正義感があります。そこから出発し，何とかケインズをジャスティファイしようとして，『一般理論』を読み込んだ上で，一種の均衡状態のもとで非自発的な失業が存在するという理論が正しいものであることを非常にシンプルに導いています。

枯淡の領域に入ったと言うと大げさかもしれませんが，大瀧君は学問的に何か枯淡の領域に入ったのではないか，そういった気がしています。

大瀧先生の研究雑感

加藤　ふと思ったのですが，大瀧先生のモデルには複数均衡を持つものが多いんです。若き日の Fukao and Otaki（1993）は，日本的雇用とアメリカ的な雇用との複数均衡でしたし，貨幣の研究である『貨幣・雇用理論の基礎』のモデルも，間宮先生が解説してくださったケインズの再解釈のモデルもそうです。連続だったり複数だったりという形で均衡が出てくる場合何が問題かというと，どれが均衡になるのか分からないという点です。そうなったときに出てくるのが均衡選択の問題ですが，大瀧先生はゲーム理論などのように複雑な数学などを敢えて否定して，社会のモラルや倫理的な直観などを利用して，どの均衡が自然かといったことを議論しています。ある意味で，数学的アプローチによって複数均衡を出し，文学的あるいは倫理的な感覚によって均衡選択を行うというのが大瀧先生のメソッドではないかと思います。

國則　設研絡みで今思い出したのですが，大瀧さんは，部屋の外にいる人も「大瀧さんが今来ている」と分かるくらい，存在感のある方でした。設研ではいろいろな研究会などにも参加されていらしたのですが，黙っていたことがないのではと思うくらいよく質問をなさっていました。本質的なところをズバッと質問する。「私はこう思うのですが，どうなのでしょうか」といったやりとりをなさるので，逆に聞いているほうが，「ああ，こういうまとめ方をすればいいのか」などと勉強になりました。発表者と大瀧さんのやりとりを聞くことで，「ああ，こういうふうに考えているんだ」というのが分かる。質問を通じて本質を我々に教

えてくれるような，そんな役割も果たされていたと思います。

加藤　確かに大瀧先生がいらっしゃると，報告が報告でなくなってしまって対話になってしまうということがしばしばありました。大瀧先生がズバッと質問されて，報告者もそれに対応することに一生懸命になる。するとまた大瀧先生が新しい論点を出す。そして，どんどん脱線していく……。後になって，この報告は一体何だったのだろうということが，しばしばありました（一同笑）。でも，そこで生まれた議論や論点が，何か次の論文に結びつくような成果になっていったりするなど，面白いこともいろいろと起きるんですよね。

竹下　先生方から経済学の素人でも分かるようにご説明いただき，大瀧先生が常々仰っていたのはこういうことなのだと実感しております。改めて今，上のほうから「竹下君も法律家だけど普通の人に分かる言葉で論文を書いてね」と声が聞こえてくるようです。

大瀧先生は非常に原理的なところに関して本質を突いてくる方で，それは法律学に対してもその通りでした。代表的な事例は，株式会社の有限責任に対する批判です。法律学の観点からすると，株式会社制度が有限責任制であるということは大前提なのですが，「その大前提のところに対し，本当に君たちは疑いを持って考えないのか」と突っ込まれるのが，まさに大瀧メソッドなのではと思います。おそらく大瀧先生のこうしたところが，先ほど堀内先生が仰った「パラダイムシフト」につながっていくのではと思いますし，そういったことを心に留めて，若い研究者として――私はもうあまり若くないのですが，頑張っていかねばと思った次第です。

加藤　ありがとうございます。もっと議論したいことはありますが，時間も尽きてしまいましたので，そろそろパネルディスカッションを終わらせていただき，次のプログラムに移りたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

参考文献

Fukao, K. and M. Otaki (1993), “Accumulation of Human Capital and the Business Cycle,” *Journal of Political Economy*, 101(1), 73-99.

Otaki, M. (2018), “Has the Second Postulate of Classical Economics Been Abandoned or Extended?” *Social Science Japan*, No. 58, 18-22.

数学と文学

2018年9月6日
青山学院大学
間宮陽介

1

１．大瀧さんの文学好き

「我が心は石にあらず——私の青春奮闘記」
（『経済セミナー』、495号、日本評論社、1996年）

２．最期の５年間に垣間見えたもの

最期の５年間に、４つの雑誌・単行本で、大瀧さんに同伴することになった。

①『日本経済：社会的共通資本と持続的発展』
（間宮陽介・堀内行蔵・内山勝久編、東京大学出版会、2014年9月）

- 國則守生・大瀧雅之「効果的な二酸化炭素排出制御」
- 間宮陽介「漁場の共同利用と自治的管理」

2

②『現代思想 2015年3月臨時増刊号』（総特集：宇沢弘文）

- 大瀧「宇沢弘文先生とケインズ経済学」
- 間宮「社会的共通資本の思想」

③『社会科学における善と正義』（大瀧雅之・宇野重規・加藤晋編、東京大学出版会、2015年5月）

- 大瀧「理論経済学における善と正義——個人と社会の相互作用」
- 間宮「分割の正義と不正義」

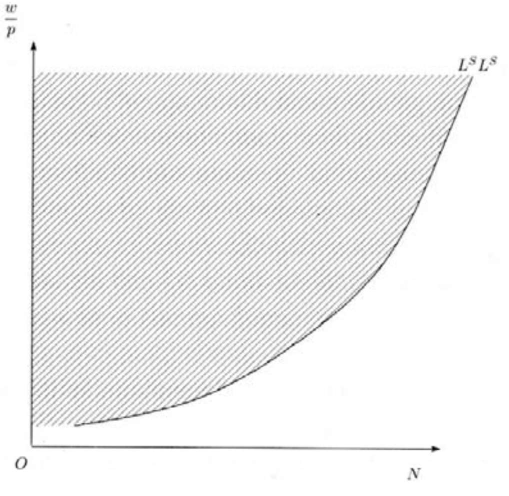
④ *Social Science Japan Newsletter* (Number 58, March 2018)

- 大瀧 "Has the Second Postulate of Classical Economics Been Abandoned or Extended?"
- 間宮 "The Ideological Background of Keynesian Economics"

3

$$L^s = \left\{ N \mid \frac{w}{p} \geq \frac{d\varphi(N)}{dN} \right\}$$

Figure　Feasible Set of Labor Supply



出所：論文④，21頁

4

３. ある空想：大瀧さんがもっと長生きしていたなら
～中島敦『名人伝』からの着想

戦国時代、趙の都、邯鄲にいた紀昌という若者、修練のすえ、百発百中、髪の毛に結ばれた虱の心臓すら射抜くまでになった。しかし不足を感じた彼は山に籠もり、不射の射の至芸に達した老隠者に教えを乞う。石の上にも9年、ようやく山を降りた紀昌は弓の射方はおろか、弓の存在さえ忘れていた（中島敦『名人伝』のあらすじ）

大瀧さんは弓＝数学の存在を忘れることはないだろう。だが彼の数学と文学は論文④のような形で、調和するに至ったのではなかろうか。

5

シンポジウム「雇用・貨幣・リベラリズム：大瀧雅之氏の研究を振り返って」

大瀧雅之氏の思い出

大瀧雅之氏の思い出 1	柳沼　壽	法政大学名誉教授
大瀧雅之氏の思い出 2	中村 圭介	法政大学大学院公共政策研究科教授 東京大学名誉教授

大瀧雅之氏の思い出 1

柳沼　壽
法政大学名誉教授

皆さん，こんにちは。柳沼と申します。私と大瀧さんとのつき合いは 35 年くらいになります。その点ではものすごく長く，中身の濃いおつき合いをしたと思うのですが，今振り返ると「たくさん飲んだな」という，そういう印象が濃くて……（一同笑）。誠に申し訳ないのですが，具体的に何を話したということがどうもはっきりと頭に出てこないのが少し残念です。

私が大瀧さんと最後に会ったのは，今年の 4 月 10 日，設備投資研究所（設研）で彼が報告をしたときで，そのときの発表内容は，先ほど間宮先生が紹介された Feasible Set の場合についての論文でした。その前に「今度こういう発表をするんですよ。」という前置きのあと「ケインズはこういうことを言っていますが，これをこういう具合に書きかえると，こう成り立つ」云々，との説明を聞いて，「いや，それはなかなかすごいね」と返したのを覚えています。その後改めて文章を読んで，そう解釈してもおかしくないということを，あのような形で不等号にまとめる手際のよさ，著作の読み方はすごいなと思いました。普段であれば夕方発表して，その後一緒に飲みに行くという話になったはずなのですが，その日は午前中の発表でしたので残念ながら飲みに行くことができず，その後「夏休みも近づいてきたから，そろそろ飲もうか」と思っていたときに訃報の連絡が来て，私は全く言葉を失ったという状態にしばらくなってしまいました。

設研嘱託時代の大瀧さん

「大瀧先生」，「大瀧さん」，ないしは，さっき間宮先生が仰ったように「大瀧君」と言うのがよいような気もしますが，彼が日本開発銀行時代の設備投資研究所に，最初に嘱託研究員として来たのが 1983 年でした。私もその頃研究所におりましたので，35 年ないし，それプラスアルファのおつき合いということになります。その頃嘱託研究員としていらっしゃったのが，今日もご出席いただいている山崎福寿先生でした。その前の代には，岩田規久男先生，堀内昭義先生などがおられたと記憶しています。そして，そのもう一つ前の代には，宇沢弘文先生や貝塚啓明先生などがおられましたが，大変長い歴史のなかで，素晴らしい，錚々たるメンバーに来ていただいており，そのなかに大瀧さんも加わっていただいたということだったと思います。

大瀧さんが大変優れた理論家であることは，既に皆さん方がご紹介されている通りですが，私も最初に会ったときは，とにかく声が大きいという印象を持ちました。声が大きいこともそうですが，お酒もたくさん飲むし，飲み出すと口角泡を飛ばすようにして議論が始まるということで，こんなに激しいやりとり，飲み方をする人は初めてだという印象も持ちました。そして，果たしてこの後どのように大瀧さんが成長していくのかということを，ある意味では興味も持ったわけですが，残念ながら私も 1988 年に法政大学に移り，またその少し前，1986 年に大瀧さんも神奈川大学に職を得たので，その後は議論する機会は必ずしも多くありませんでした。その頃のお話はまたこの後でさせていただくとして，まず，設研時代に大変印象的なことを申し上げてみたいと思います。

通常，嘱託研究員として研究所に来た場合には，研究所にいる我々銀行のスタッフと勉強会を開いたり共同研究をしたりするのが一般的でした。その共同研究ないしは勉強会を通じて，私たちはアカデミックの世界で何が議論になっているかを知ることができました。また嘱託としておいでになった方々は，開発銀行のスタッフとの議論等を通じて現実社会と経済理論とのギャップを感じることになります。そうして，理論・学問の世界と現実との対話を研究活動に活かしてもらえればという期待があったわけです。

大瀧さんはとにかく理論派でしたので，ご自身では計量的な分析にはほとんど関わらなかったと思います。当時の研究員との共同研究というのも確か鈴木さん（現在明治大学名誉教授）1 本だけでした。その代わり，当時最先端の研究成果，例えば日経・経済図書文化賞などを受賞したような本を，彼がパラフレーズしてくれて議論するという場がありました。参加したのは，まず石黒隆司さんでした。設備投資研究所の初代所長は下村治さんですが，石黒さんはいわば「中興の祖」と言うべき方だろうと思います。銀行業務に精通し，後に開発銀行の監事にもなられた方ですが，一方で経済学・経済理論に大変強い関心を持っておられ，数学が出てきてもあまり嫌がることがありませんでした。その石黒さんと，大瀧さん，それから信州大学の徳井丞次さん，それに私の 4 人で監事室にホワイトボードを持ち込んで，1 章ごとに読み進めみんなで議論するという場でした。これは大変有意義なもので，最先端の研究成果をきちんと読み解いて，そこで何が起きているか，どういう議論があるのかということを知ることは私自身も大変勉強になりましたし，おそらく石黒さんにとっても新鮮な記憶として残っていたのではないかと思います。大体夕方に行われるものですから，終わってから一緒に飲みに行くこともしばしばあり，また議論が続くといった感じでした。

石黒さんの行きつけのお店が，確か新橋の銀座日航ホテルの裏にあったのですが，あるときに石黒さんのいないとき，山崎さんと大瀧さんが二人で行き，ボトルを空けてしまったという話を聞きましたので，その勉強会の社会的費用は実は結構高かったのではないかというような気もしております（一同笑）。このように，大瀧さんは設備投資研究所におられる間，我々研究員ないしは石黒さんまで含め，銀行のスタッフと交流をし，大いに刺激を与え

てくれました。監事室で大瀧さんがいろいろと説明をするとき，小指をちょっと上げる癖があり，それが彼一流の粋がったスタイルだなと思ったこともあります。

大瀧さんの研究の思い出

そのような形で大瀧さんは設備投資研究所の嘱託研究員として過ごされた後，神奈川大学に勤務され，私は法政大学に移ることになりました。その後も大瀧さんは設備投資研究所にしばしば顔を出していましたし，設研からディスカッション・ペーパーも出していました。私にも研究会の案内が来るのですが，私の印象では全体の 3 分の 2 くらいと思うほど，とにかく大瀧さんの発表する研究会が圧倒的に多かったという記憶があります。研究上でのつながりはほとんどなかったのですが，終了後の飲み会でご一緒するというのはずっと続いていました。

また，先ほど國則先生からもお話がありましたが，本日欠席の堀内行蔵先生，それと私の 3 人で地球環境問題についての勉強会を開催したことがありました。そのなかで割引率の問題について議論する機会がありました。それからさほど期間が経たないうちに，大瀧さんは英語でそれをまとめて発表していました。使っているテクニックはクーン・タッカー・定理だったと思うのですが，あまり複雑にせず，とてもシンプルな形で，最適な社会的割引率のあり方を導出するというような内容で，その手際のよさに大変感心した記憶があります。

その後，2014 年に堀内昭義先生編著で刊行された『日本経済――変革期の金融と企業行動』（東京大学出版会）のなかで，私は初めて大瀧さんとジョイント・ペーパーを書きました。もっともジョイント・ペーパーといっても，3 分の 2 は彼が書いたものでした。論文のメインタイトルは「経営権と企業成長のコンフリクト」で，サブタイトルが「企業成長の源泉としての人的資本蓄積の再評価」というものでした。今でも思うのですが，これはサブタイトルのほうが本来本質的で，逆にしてもよいのではないかとも思います。いずれにしても，日本企業の経営の特色としてずっと注目されてきた，企業の内部で人を育てるということがとても重要であり，さらに言えば，それが企業成長の源泉になるということを，アローの学習効果とは違う形で定式化したものでした。その際に，遅まきながら「ああそうか，彼は日本の企業システム・経済システムというものを一般的なツールとして評価し，それをもう少し広めたい。そういう意を強く持っているのだな」ということを感じた次第です。

また，先ほど間宮先生が，大瀧さんは英語だと雄弁で日本語だとそうではないところがあるといったお話をされていましたが，そのジョイント・ペーパーは，日本語でしたがとても流れるように書いているという印象を持ちました。流れ過ぎではないかと思うくらい流れていて，少し引っかかる部分をロジカルに説明しようとすると，それだけでも結構なボリュームになりそうな部分がどんどん流れて書かれていました。それは，おそらく彼の頭のなかに「ここはこういうことで，こうやって言い切っていいんだ」というイメージがあり，だか

らこそ一気に書けたのかなと，今になって理解できる気がします。2010 年代以降に書かれた彼の論文は，比較的流れがよいものが多いのではと思っています。

大瀧さんの経済学への思い

それから，大瀧さんはある意味で海外への影響を大きく意識していたように思います。インドには何度もでかけており，出張から戻った後に一緒に飲んだとき，「日本の経済の仕組みなどを踏まえて，欧米発と違う経済学を考えたい」と言っておられたこともあります。堀内行蔵さんと共著で，下村治さんについてまとめた Springer から刊行された書籍がありますが，それも欧米発ではない日本発の経済学の原点として大瀧さんが捉えたものではないかと思います。

この会場の外の壁際に彼の著作がたくさん並んでいましたが，大瀧さんは入門書もかなり書いています。それから，確か共著だったと思いますが，高校の教科書も書いていたように記憶します。専門家向けの本や論文だけではなく，そうではない人のために，経済や文化とは何かということを一生懸命伝えていました。決して数式を軽んじるわけではありませんが，単なるテクニックを学習する入門書ではなく，先ほども紹介がありましたように哲学者だとか思想家の話も含めた，全く違う趣のものを残してくれたのは，彼の素晴らしい功績だと思っております。

橋本寿朗先生と大瀧さん

それから，もう一つ思い出すのは，東大の社研（社会科学研究所）と法政大学の経営学部とのつながりです。堀内行蔵先生が法政の経営学部から人間環境学部に転出された後任として，社研の橋本寿朗先生に法政に来てもらいました。橋本さんは，社研との関係もあり，その後社研に戻って，再度法政に来るという複雑な経緯もありましたが，私はあの人こそ法政のトップになられるかと思っていました。私はちょうど学部長のときだったこともあり，二度目に法政に来たときすぐに主任になってもらいました。その後経営学部長になって，総長選挙に出るというように思っていたのですが，残念ながら経営学部長になる直前に亡くなってしまいました。しかし，社研に在籍していたとき，大瀧さんもいましたので，3 人でよく飲みに行くこともありました。3 人ともよくしゃべるし，とにかくよく飲みました。橋本さんはよく大瀧さんを励ましていたと記憶します。夜中，大分遅くなって，皆さんタクシーで帰ったということもあったので，橋本さん，大瀧さんそれぞれの御家族に大変ご迷惑をおかけしたのではないかと思います。残念ながら橋本さんも亡くなってしまったので，その意味ではこの時期の社研の人たちがだんだん少なくなってきているのは本当に寂しいなという印象を持っております。

大瀧さんの印象

時間もありませんので，最後に大瀧さんがどのような生き方をしていたかということについて，私の印象を申し上げたいと思います。今年出版された『経済学』（勁草書房，2018年）のテキストのなかにいろいろなことが書かれていますが，この本はそれまでの入門書と全く違い，経済理論と数式以外に，その背景にあるモラルや正義感に触れている箇所が多くあります。また，そうしたモラルや正義感に関する思想家の紹介等もなされ，大変奥行きの深い内容になっており，素晴らしい本だと思っています。お酒を飲んだときに大瀧さんがよく名前を挙げていたのが，ハンナ・アーレント，それからレイチェル・カーソンでした。『経済学』のなかにも，ハンナ・アーレントが出てきます。経済学の論理的世界を超えた所で，人間の奢りに対する批判や人間の弱さについて考察が加えられているのは素晴らしいと思います。先ほどご紹介がありましたムーアの『倫理学原理』については，昨年大瀧さんから復刻本をいただきましたが，ちょうど読み始めた頃に大瀧さんが亡くなってしまうこととなりました。これも先ほどご紹介のあった社会科学研究所の論文集などを読みながら，これも私の研究テーマにしていきたいと思っております。

最後にひと言，彼自身のキャラクターについて思うことを述べます。配付された冊子の最後に掲載されている「我が心は石にあらず」という彼のエッセイを読むと（付録；p. 93），彼のなかで，経済学の世界にちょっと遅れてきたというような意識をずっと持っていたことが書かれています。その後自身の研究を重ねるうちに，今度は欧米発ではない経済学というものをつくろうという気持ちにもなっていったと思いますし，それに向けて格闘し，葛藤もあり，悩みや不安もあったのと思います。しかし，そういう不安と劣等感のなかで，何かに救われることもあったと聞いています。改めて思い出してみると，飲んだときにしんみりとルオーの「ピエロ」という絵の話をしたこともあります。私もそれに対して，宮沢賢治の『よだかの星』という話をして，悲しみを背負って生きることに想いを致した記憶があります。そういうことを思い出すと，とてもデリケートな人だったなと改めて思い出します。社研の研究室に数年前にお邪魔したとき，彼はCDをたくさん持っていたのですが，2人でカール・シューリヒト（指揮者）のブルックナーの第7交響曲などを聞き，はるかな遠い天に引上げられるような世界を二人で味わうことができたのは素晴らしい思い出となっています。今度どこかで会うことがあれば，静かに飲みながらモーツァルトやブルックナーを聞きたいですね。心からご冥福をお祈りいたします。ありがとうございました。

大瀧雅之氏の思い出 2

中村 圭介
法政大学
東京大学名誉教授

大瀧さんと社研同期の中村圭介です。最初にお会いしたのが 1996 年の 4 月のはじめ，社研の所長室，和田春樹所長の部屋でした。声が大きくて，自信がにじみ出ていて，すごい人だなあというのが第一印象です。『20 世紀システム』に収められていた論文を読んで，そうかマクロ経済学，経済成長論の研究者なんだとわかりました。同期とはいえ，専門分野も違うし，研究スタイルも違うし，大瀧さんがお元気なときにはとくに親しくしていたわけではありません。たまたま部屋が 4 階という同じフロアーで，橋本寿朗さんの部屋で二人で大声で議論しているのを聞くくらいでした。大瀧さんも私も毎日，研究室に来ていましたので，挨拶はしていましたが，お昼を一緒に食べにいったこともお酒を飲んだこともありません。

大瀧さんが具合が急に悪くなって研究室に来なくなり，そのときに彼の個人的な事情を初めて知りました。「あーっ，大瀧さんはとても傷つきやすく，壊れやすい人なんだ。だからこそ固い殻を作っていたんだろうか」などと思うようになりました。その大瀧さんが研究室に来られるまでに回復し，とはいえ，毎日ではなく，何日に 1 回とかのペースだったと記憶していますが，私の研究室に来たり，あるいは，私の方から彼の研究室に行ったりして，軽く話をするようになりました。私には弱っている人たちを引き寄せる磁力でもあるのでしょうか，あるいは類は友を呼ぶのでしょうか，彼も安心して話をしてくれました。

彼がその当時，最も心配していたことの一つは，解雇されるのではないかということでした。このままの状態では仕事も続けられず，失職してしまう，そうしたらどうしようかと心から脅えていました。私は，「まあなんとかなるよ」と落ち着かせることもありました。

少しずつ回復に向かっているのがわかると，大瀧さんに経済学の講義を週に 1 回してもらうようお願いしました。人事管理や労使関係を一緒に調査研究している若い人たちに経済学をきちんと学んで欲しかったのと，授業をすることで大瀧さんも少しずつ自信を取り戻せるかもしれないと考えたからです。もちろん，私も聴講いたしました。ノートも取りました。ただ，この講義はそう長くは続かなかったように記憶しています。せいぜい 2 か月程度だったでしょうか。大瀧さんが元気になってご自分の研究に忙しくなって，自然と消滅しました。それでも大瀧さんの記憶にはずっと残っていたらしく，若手の労働研究者はとても優秀だと言っておられました。私の目にはさほど優秀には見えなかったのですが……。

大瀧さんは，企業に定着し，スキルを高め，生産性を向上させ，より多くの報酬を得るようになるというキャリアを高く評価し，その経済的合理性を強調していました。90 年代後半から 2000 年代前半に「労働市場の流動化」「成果主義」などの言葉が流布してくると，そういう風潮に対して強く抗っていました。彼は働く者の側に立っていました。だからこそ，現代の経済学者には珍しく，労働組合の意義を理解していました。アメリカの新古典派ほどひどくはないですが，日本の経済学者の多くは労働組合の交渉力，機能を認めてはいませんが，大瀧さんは例外的存在でした。

レンゴー・アカデミーという研修プログラムがあります。その名のとおり，労働組合のナショナルセンターである日本労働組合総連合会，いわゆる連合が提供する研修プログラムです。1 年に 2 週間，春に 1 週間，秋に 1 週間，およそ 25 名近くの組合役員やスタッフが研修施設に缶詰めになって，朝から晩まで大学の教授たちを講師として経済，政治，社会保障，財政，そして労働組合について学ぶプログラムです。私はそのレンゴー・アカデミーの教務委員長を務めておりますが，日本経済については大瀧さんにお願いしていました。講義は 1 回で 4 時間。大瀧さんに講義をお願いする際，私は次のように念押ししました。「講義を受ける人々は組合運動をしているけれど，経済学を学んだことのある人はごくわずかです。だから，わかりやすく教えて欲しい。数式などは使わないで欲しい」。アカデミーでは受講者たちに授業について選択式の質問（理解できたかとか）と自由記述で評価することをお願いしていますが，大瀧さんの評価は全体的にみて高かった。理解するのに難しかったけれど，経済の仕組みをなんとなくわかったように思うとか，大瀧先生の真摯な話し方がとてもよかったとかです。そうした高い評価があったからこそ，何年にもわたってお願いし続けてきました。

ところが，去年の春，急に具合が悪くなったということで，突然，キャンセルとなりました。私はとても心配して，社研の人々に，大瀧さんの具合をたずねてみたのですが，「とくに悪いということはなく，元気だよ」との話でした。去年の秋，レンゴー・アカデミーの事務局が大瀧さんの研究室を訪れ，今年の春，講義をしてくださるかどうかをたずねたところ，快諾してくださいました。

今年の 5 月 16 日，研修施設のある東急田園都市線のあざみ野まで自宅からタクシーでやってこられ，13:30 から 17:30 まで講義をされました。事務局の話は次のようです。

> 「到着直後の先生は，顔色も蒼白で表情もこわばり，大変お加減が悪そうでした。前の晩から急にひどい胃痛になってしまったけれども，昨年の講義を体調不良でキャンセルしてしまったので，今年はなんとしても講義に穴をあけるわけにはいかないとのことでした。講義の最初は，お元気なときの大瀧先生とは別人のようで，椅子から立ち上がられることもなく，声も弱々しい

> 感じで，一つひとつの言葉を搾り出すように，お話をされていました。汗をひどくかかれていて，何度もお水を飲まれていました。30 分話しては 15 分休憩，という感じで講義が進みました。講義が進むにつれ，大瀧先生の声にも力がこもり，少し体調が戻られたようにもお見受けし，お願いした時間まで講義してくださいました。講義は，「経済政策の課題」というテーマで，1980 年代からバブル期を経て，現在の構造改革路線へ至る経済政策史について，経済政策のあるべき姿から振り返ってみるというものでした。これまで，経済学を学んだことのない受講生に対して，とてもわかりやすい言葉で話していただき，非常に勉強になったとの感想が多く聞かれました」

大瀧さんの最後の講義でした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

閉会挨拶

大石 英生

日本政策投資銀行
設備投資研究所長

日本政策投資銀行の大石でございます。皆様に比べて，私自身の大瀧先生とのおつき合いは長いものではなく，2012 年頃，行内の自主勉強会のような場で顔を合わせたのが初めでした。本日もいろいろお話にありましたが，1980 年代から 90 年代の，大瀧先生が設備投資研究所（設研）の嘱託研究員でいらっしゃった頃の話は，2014 年の設研設立 50 周年の際にとりまとめた『設研のおもいで』という冊子に大瀧先生が寄稿されている文章を読んで知る限りだったのですが，こうして皆様のお話を聞いて，「やっぱりそうだったのだな」ということを改めて感じました。

大瀧先生には，近年では顧問として非常に熱心にご指導をいただいておりましたが，やはりそのご指導の中心線というのは，80 年代から 90 年代に嘱託研究員としていらした際に設研に対して持っていたイメージであったと思います。そのイメージを設研の理想の姿として考えていただき，また先生には「DBJ 金融アカデミー」という場で，若手職員向けの講義もお引き受けいただいておりましたが，我々行員や，そうした場での若い人たちに対する接し方の根底には，ご自身が昔，嘱託研究員であった頃のイメージがあったのではないかなと思っております。そのあたりが，今日皆様のお話をお伺いして非常によく分かった次第です。

シンポジウムのなかで，貨幣，それから労働とはどういうことかといった，非常に大きなテーマについてもお話がありました。大瀧先生にはそうした議論も踏まえて，設研や DBJ がどのような方向で動いていくべきであるのか，どのような役割を果たしていけばよいのかということを，しっかり指導・先導していただきました。また，学際的な研究のアレンジや海外への情報発信について，本来であれば我々がやらなければいけないところも先生が率先してくださり，強力に牽引していただきました。

本日ご登壇いただいた先生方も，いかに大瀧先生の遺志を次の世代につないでいくかということをテーマに挙げられていたかと思います。我々設研のメンバーとしても，設研が，あるいは DBJ がどのような形で世のなかに貢献できる組織になっていけるかということについて，先生の遺志を引き継いで，しっかり頑張っていきたいと思っております。先生方には引き続き，厳しく見守っていただければと思っております。

以上，大変簡単ではございますが，本シンポジウムの閉会の挨拶とさせていただきます。本日お越しいただきました皆様，それからご登壇いただいた皆様，大変ありがとうございました。改めて御礼を申し上げたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

付　録

―シンポジウム会場配付資料―

大瀧雅之氏

福島県いわき市に生まれる。磐城高等学校から東京大学経済学部に進学。1986 年，神奈川大学経済学部に着任。1991 から 1995 年を青山学院大学で助教授として若き日を過ごす。1996 年 4 月に東京大学社会科学研究所に助教授として着任し，2001 年より，同研究所教授として教育と研究に従事していた。

その間，大蔵省財政金融研究所主任研究官（1996～1998 年），経済企画庁経済研究所客員主任研究官（1998～2004 年）などを歴任した。とくに日本政策投資銀行（旧日本開発銀行）設備投資研究所では，東京大学大学院在学中の 1983 年より嘱託研究員等として長年研究に取り組み，近年は顧問として指導に当たる傍ら，2015 年には SpringerBriefs in Economics : Development Bank of Japan Research Series を発足させるなど，実務とアカデミズムの橋渡しに尽力した。

『景気循環の理論――現代日本経済の構造』（東京大学出版会，1994 年）で第 37 回日経・経済図書文化賞を受賞。動学的一般均衡の枠組みに基づき，日本的雇用慣行に基づく日本経済のダイナミズムを明らかにする。その後，世代重複モデルに基づいて，ケインズ経済学のミクロ的基礎付けを行い，その研究は『貨幣・雇用理論の基礎』（勁草書房）および *Keynesian Economics and Price Theory: Re-orientation of a Theory of Monetary Economy*, Springer に結実する。エドマンド・バーク，G・E・ムーア，ジョン・デューイ，ハンナ・アレントといった著者の作品に親しみ，理論マクロ経済学に留まらず，政治哲学や倫理学の研究者と広い研究交流を行った。2018 年 7 月 2 日永眠。

追悼文

大瀧さんを偲んで	堀内 行蔵	法政大学名誉教授
大きな声　繊細な心　優しい笑顔	宇野 重規	東京大学

大瀧さんを偲んで

堀内 行蔵

大瀧雅之さんと初めて設備投資研究所（設研）でお会いしたのは，かれこれ40年ぐらい前になります。当時，かれはまだ大学院に在学中で，勉学のかたわら設研の仕事のお手伝いをしていました。初対面では，かれの大きな声とがっちりした体格が強く印象に残っています。

設研では，私は実証分析に興味があり，大瀧さんは理論研究に集中していたので，残念ながら仕事上で直接ご一緒する機会はありませんでした。ただ，設研のいいところは，研究員や学者先生が集まるフリートーキングという場があり，そこで宇沢弘文先生や大瀧さんのお話が聞けたことです。耳学問のようなものでしたが，私にとっては，経済理論のエッセンスや問題点を教えていただき大変助かりました。経済学の教科書を読んで一応理解したつもりでいたのですが，ハッとさせられることがたびたびあり，今思えば貴重な経験をさせていただいたことにとても感謝しています。

それ以外にも大瀧さんとの思い出はいろいろあります。たとえば，宇沢先生，上司の石黒隆司さん，大瀧さんなどとよく一緒に飲みに行きました。ビールやお酒が入るとみなさんの会話は談論風発的となりとても愉快な時間になりました。

あるとき，拙宅に柳沼壽さん，山崎福寿さん，大瀧さんをお招きしたことがありました。その際，折角の機会なので，大切にしまっておいた高級ブランディーを出したところ，気がついたら空になっていて，みんな酔っぱらっていました。いいお酒を楽しむという雰囲気ではさらさらなく，若いエコノミストがわいわいがやがやと会話を楽しんだ訳で，今となっては懐かしい思い出となっています。

当時，大瀧さんとの交際で一つの出来事が記憶に残っています。かれは，頭の回転が速いため，会話の受け答えが速くなりがちでした。このため，会話がスムーズに流れないことがあり，私はかれに「しゃべる前に3秒待ってみたらどうか」と勧めたことがあります。余計なことを言ったかなと若干気にかけていたところ，その後しばらくして会ったとき，大瀧さんが「3秒ルールは守っていますよ」とにっこりされたことを覚えています。

その後，私は設研を離れ大学で教えるようになり，大瀧さんと会う機会は減りました。また，私の研究テーマは，学生の要望もあり日本経済から環境経営へと転換しました。この間，大瀧さんは，経済理論の研究をさらに掘り下げ，次々と成果物を国内ばかりでなく海外でも発表されていました。そのなかから拙宅にも送っていただいた書籍や論文があり，理解するのはなかなか難しかったのですが，大瀧さんが世界的に活躍されていることを知り，大変う

れしく思っていました。

ところが，私は 3 年ほど前の 2015 年の夏ごろから，大瀧さんと一緒に研究活動を行うことになりました。きっかけは内山勝久さんからのご連絡でした。設研がシュプリンガー社から出版している叢書において，「下村治博士の遺産と戦後の日本経済」について書いてはどうかという提案があったからです。英文で日本の研究者の業績を世界に発信するという，この有意義な活動について，大瀧さんは中心になり積極的に取り組んでおられました。

下村氏は，戦後の昭和の時代に活躍したエコノミストであり，高度成長論とゼロ成長論という 2 つのビジョンを世に提示したことで有名ですが，設研の初代の所長としてビジネスマンの間で大いに注目されていました。

下村氏の業績を英文で世界に問うという仕事については，私自身，大変気分が高揚するのを感じました。ところが一つ問題が生じました。分析期間に昭和だけでなく平成の時代も含めたいと考えたからです。私は地球環境問題に集中していたので，平成の時代の日本経済をまとめて分析したことがありませんでした。困っていたときに，「その部分はわたしが引き受けます」と言って，助け船を出してくれたのが大瀧さんでした。私は，大変ありがたいと思ったと同時に，理論家としての大瀧さんが，平成の時代をどのように分析するのかとても興味がわきました。大瀧論文の主旨は，ゼロ成長の時代に政府や企業が成長戦略を追求するということには問題が多いというものでした。結果として，大瀧さんは，下村さんだったらきっとこう言うに違いないということを，理論的に明らかにしてくれたのだと思います。

大瀧さんとの共著は，2017 年の秋に出版されましたが，これを機会にかれといろいろと意見交換をしたことは大変有益でした。2015 年の秋，社研の大瀧さんの研究室にお伺いし，下村氏の成長理論，実証分析，政策とビジョンなどについて，ゆっくりと話し合ったことは今でもはっきりと思い出されます。私にとってなによりもうれしかったのは，大瀧さんのような理論家が，下村氏に興味を持ち，経済成長の教祖というような世俗のレッテルを超えて，一つの時代を大きく切り開いた人物について理解を深めて行かれたことです。

つい最近のことですが，もう一つ大瀧さんとの思い出があります。かれとは，議論やメールをする機会が増えていました。最近の貧困や格差の問題の解決のためには，私は東洋の思想や倫理が重要と考え，無謀にも仏教と経済学を結びつけることを試みていました。

一応試論らしきものを書いたので，大瀧さんに読んでもらいコメントを求めました。当初大瀧さんから厳しい批判が来ると予想していましたが，かれも倫理問題に興味があったようなので，根本的な点での批判はなく，大筋で意見が一致するようになったかと思います。将来のビジョンについても，仏教で言うところの「中道の経済」について説明したところ，かれから有益な示唆をいただきました。大瀧さんとは，厳密な経済理論から離れて，いろいろな議論をしましたが，かれの心の奥底にある正義感を感じました。

大瀧さんに最後にお目にかかったのは，人通りがまばらになった昨年の 12 月末でした。かれの還暦をお祝いして，柳沼さんと國則守生さんと一緒に，市ヶ谷駅の近くの居酒屋で飲

んだのですが，いつものようにお元気で活発に持論を展開されていました。この先，大瀧さんが，ますます優れた研究成果を発表され，円熟味を増していくことを期待し，またお会いしましょうと握手を交わしました。これが，大瀧さんとの最後の集いとなってしまいました。

　僭越ながら，私は，大瀧さんは経済研究で生産性がどんどん高まっていると感じていました。そのようなとき，突然の訃報に接したわけで，心から残念と思っております。

大瀧さんには大変お世話になり感謝しております。大瀧さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

大きな声　繊細な心　優しい笑顔

宇野 重規

昨日，ドイツから帰国しました。今日あたり，社研に行けば，大瀧雅之先生にお会いできるような気がしてなりません。

しかも，帰国後，私の研究室は先生のお隣に移ることが決まっていました。そうでなくても，廊下やエレベーターですれ違った際に，「宇野くん，今いい？」と言われて，先生の研究室に「拉致」されることが多かった私です。研究室が並びになったらどうなることやらと，恐れつつも楽しみにしていました。結局，先生のお隣になることはかないませんでした。

研究の上でも，私は先生の微妙な「お隣」でした。西洋政治思想史，それも 19 世紀フランスの政治思想家トクヴィルを研究する私に，どういうわけか先生は最初から積極的に声をかけてくださいました。先生からしてみれば，あまり縁のなさそうな専門分野に思えます。ところが，先生は私の専門というより，私自身に関心を持ってくださったように見えました。

最初にお話ししたのは，私が社研に着任して早々，紀要編集委員会の場であったでしょうか。橋本寿朗先生を長とする委員会でしたが，いずれの先生の声も大きく，度肝抜かれたのをよく覚えています。とりわけ声が大きかったのが大瀧先生でした。びっくりしたのは声の大きさだけではありません。紀要という媒体のあり方を含め，歯に衣着せぬ率直な議論のやりとりに衝撃を受けました。

大瀧先生は着任早々の私に，紀要『社会科学研究』に特集を組むようアドバイスしてくださいました。当時の私には，一人で特集を担当する自信はありませんでしたが，先生の後押しのおかげで「代表制の危機」という特集を組むことができました。思想史をやってきた自分が，社研でどのような研究を行っていくべきか。そう迷っていた私にとって，とても良いスプリングボードになった気がします。

その後も先生は，次々に『社会科学研究』での共同研究を提案されてこられました。ロールズ研究，ケインズ研究と続き，それぞれは紀要の特集として実現し，最終的には研究書にもまとめられました。先生の企画力と行動力に，つねに引っ張られてきたことを思い出します。

「次も何か面白いことをしようぜ」，先生は事あるごとに，そうお話しになっておられましたよね。その約束を実現できなかったことを，残念に思います。

政治思想史を，大瀧先生にとって「あまり縁のなさそうな専門分野」と書きましたが，これは私の思慮の浅さを示すものであることが次第に分かってきました。

あるとき，エレベーターで乗り合わせた際に，先生は「アレントってどう思う？」と話し

てこられました。マクロ経済学者の口からいきなり政治思想家の名前が出てきたことに，戸惑ったことを覚えています。私はしどろもどろになって，分かったような，分からないようなお答えをしましたが，先生はズバリ，「彼女の「人間が生まれてきたのは，始めるためである」という言葉が好きなんだよね」とおっしゃいました。今ではこの言葉は，私にとってもとても好きな言葉の一つです。

先生とのロールズ研究についても学ぶことが多かったと思います。ロールズの正義論といえば，功利主義批判をその出発点にしているわけですが，先生はロールズの功利主義理解について疑問をお持ちのようでした。ロールズは功利主義を叩くための藁人形にしているのではないか，功利主義とはもっと深い思想的意味があるのではないか。そのような先生の問いかけの思想的意味を，私は少しずつ理解していくようになります。

先生は繊細な心と真っ当すぎるほどの正義感覚をお持ちの人でした。いつしか，先生の経済学研究もまた，そのような繊細さと正義感覚に基礎を置くものであることが，鈍い私にもわかるようになってきました。そう，マクロ経済学と政治思想史を遠い研究分野であると考えていた私の理解が浅はかだったのです。二つの研究分野は，先生の中では極めて近い位置にある「お隣」でした。20 年近く同僚をしてようやくそのことがわかってきた私は，やはり先生にとって微妙な「お隣」だったと言わざるを得ません。

「宇野くんも，ようやく少しわかってきたじゃん」と笑う先生の笑顔が浮かんできます。

大瀧先生から学んだことがもう一つあります。伝記を読むことの効用です。あるとき，先生の研究室で雑談しているときに，ケインズの伝記の話になりました。先生は経済学者を研究する上でも，その生涯を知ることには意義があるとおしゃっていました。経済学者に限りません。先生はいろいろな人物の伝記を読んでいました。それもいつも英語の本であったように思います。

保守主義思想で知られるバークの伝記を読んでおられたときがありました。私も一読して，興味深い本であることがわかりました。ちょっと先生の真似をしたくなり，その本を自分でも購入して読んだことを思い出します。考えてみると，後年，私が『保守主義とは何か』（中公新書）を書いた出発点もそこにあったことになります。

これはいささか直感的な断言となりますが，フランスなどと比べても，英国には実に多くの優れた伝記があるように思います（フランスの書き手は，伝記に向いていない気がします——これは偏見！）。内容的に豊かで，研究者が読むに耐える質を維持しつつ，文章が平易で，一般の読書人でも楽しめる伝記といえば，やはり英国が本場ではないでしょうか。先生はそのような伝記を探してこられるのがお上手で，その恩恵を私はいつも受けていました。

先生に「日本にはなかなかいい伝記がないですよね」と話したところ，後日，「阿川弘之の『井上成美』はどうだろう」というお答えをいただきました。それが先生との最後の会話になりました。

どうしたらそのような本を見つけられるのかと，あるとき先生に聞いたことがあります。

答えは「本屋に行って，棚を見ていれば，自然に目につくよ」でした。実に正しい答えだと思いますが，私はいまだにその術を習得していません。先生に逝かれてしまった私は，ここでもただぼんやりするばかりです。

大瀧先生は率直な物言いをよくされました。正しいと思えば，真っ正面から相手の議論を批判することも辞さなかったのが先生の知的廉直さであったと思います。そのような批判の多くは，先生の繊細さと正義感覚に裏打ちされていました。そのような手厳しい物言いにもかかわらず，先生が多くの人に愛されたのは，先生の笑顔が理由の一つだったのではないでしょうか。

先生は愉快そうにおおらかに笑うときもあれば，いささか皮肉気味に微苦笑されることもありました。それでも一番多かったのは，なんとも優しい，他者を受け入れる笑顔だったと思います。異国で先生の逝去の報に接したとき，最初に思い浮かんだのはやはりあの笑顔でした。

その笑顔をもう見ることができないことをとても悲しく思います。

ここまで書いてきたように，私は大瀧先生の微妙な「お隣」であり続けてきました。先生から与えられた学恩を思うと，どうも自分の理解が遅れがちで，いつも薄ぼんやりしていことを恥ずかしく思います。それでも，いつまでも先生は自分の「お隣」なのだと思うと，心が少しだけ軽くなります。これからも先生からいただいた言葉を頼りに，先生の思考に，思想に少しずつでも近づいていきたいと思います。

これからも永遠の「お隣」でいさせてください。ご冥福をお祈りいたします。

ご経歴

1957 年 11 月　福島県いわき市生まれ

1976 年 3 月　福島県立磐城高等学校卒業

1977 年 4 月　東京大学教養学部文科二類入学

1981 年 3 月　東京大学経済学部経済学科卒業

1981 年 4 月　東京大学大学院経済学研究科入学

1990 年 9 月　東京大学大学院経済学研究科修了（経済学博士）

1986 年 4 月　神奈川大学経済学部専任講師

1988 年 4 月　神奈川大学経済学部助教授

1991 年 4 月　青山学院大学経済学部助教授

1996 年 4 月　東京大学社会科学研究所助教授

2001 年 4 月　東京大学社会科学研究所教授

2018 年 7 月 2 日　永眠（享年 60 歳）

業績目録

著書

『景気循環の理論――現代日本経済の構造』，東京大学出版会，1994 年，454 頁．（第 37 回日経・経済図書文化賞受賞）

『景気循環の読み方――バブルと不良債権の経済学』, 筑摩書房（ちくま新書 289）, 2001 年, 190 頁.

『動学的一般均衡のマクロ経済学――有効需要と貨幣理論』，東京大学出版会，2005 年，249 頁．

『用語でわかる!経済かんたん解説　上巻（身近な経済・経済の基本・経済の動き・日本経済の歴史・日本経済のしくみ）』，フレーベル館，2007 年，127 頁．

『基礎からまなぶ経済学・入門』，有斐閣，2009 年，xi+286 頁．

『貨幣・雇用理論の基礎』，勁草書房，2011 年，xi+151 頁．

『平成不況の本質――雇用と金融から考える』，岩波新書，2011 年，iv+185+3 頁．

『国際金融・経済成長理論の基礎』，勁草書房，2013 年，xi+182 頁．

『経済学』（アカデミックナビ），勁草書房，2018 年，313 頁．

The Origin of the Prolonged Economic Stagnation in Contemporary Japan: The Factitious Deflation and Meltdown of the Japanese Firm as an Entity, Routledge, 2015.

Keynes's General Theory Reconsidered in the Context of the Japanese Economy, Springer, 2016.

Keynesian Economics and Price Theory: Re-Orientation of a Theory of Monetary Economy, Springer, 2017.

Speculative Bubbles and Monetary Policy: A Theory Based on Japanese Experience, Lexington Books, 2018.

共著

Horiuchi, K. and M. Otaki, *Dr. Osamu Shimomura's Legacy and the Postwar Japanese Economy*, Springer, 2017.

編著

『平成長期不況――政治経済学的アプローチ』，東京大学出版会，2008 年．

共編著

『現代マクロ経済動学』（浅子和美と共編著），東京大学出版会，1997 年，448 頁．

『循環と成長のマクロ経済学』（吉川洋と共編著），東京大学出版会，2000 年，263 頁．

『家計のミクロ統計分析』（美添泰人と共編），統計情報研究開発センター，2002 年，ii+235 頁．

『金融システムと金融規制の経済分析』（花崎正晴・随清遠と共編著），勁草書房，2013 年 xiii+258 頁．

『社会科学における善と正義――ロールズ『正義論』を超えて』（宇野重規・加藤晋と共編著），東京大学出版会，2015 年，370 頁．

『ケインズとその時代を読む――危機の時代の経済学ブックガイド』（加藤晋と共編著），東京大学出版会，2017 年，264 頁．

学術論文

「トービンの q と利潤率・割引率の変動」（鈴木和志と共著）『国民経済』，152，23-39，1986 年．

「政府介入と銀行貸出の重要性」（堀内昭義と共著）浜田宏一・黒田昌裕・堀内昭義［編］『日本経済のマクロ分析』，東京大学出版会，123-148，1987 年．

「日本における雇用慣行とオークン法則」『商経論叢』，23(4)，67-31，1988 年．

「金融の国際化と国際マクロ経済学――サーヴェイ論文」『経済研究』，40(4)，366-370，1989 年．

「預金金利の自由化とマクロ経済の安定性」（山崎福寿と共著）, *Economic Studies Quarterly*, 41(1), 65-77，1990 年．

「金融の国際化と最適金融政策」（山崎福寿・深尾京司と共著）, *Economic Studies Quarterly*, 41(4), 336-352，1990 年．

「資本移動の自由化とマクロ経済」『フィナンシャル・レビュー』，19，184-201，1991 年．

「資本移動の自由化と為替レート」『青山經濟論集』，43(1)，1-28，1991 年．

「産業構造の履歴現象と財政政策」『三田学会雑誌』，84(2)，327(105)-347(125)，1991 年．

“Accumulation of Human Capital and the Business Cycle,”（深尾京司と共著）*Journal of Political Economy*, 101(1), 73-99, 1993.

「履歴現象とオプション価格付け理論に関する研究ノート」『青山經濟論集』, 44(4), 132-156, 1993 年．

「金融システムと資本蓄積（Ⅰ）」『青山經濟論集』，45(3)，169-202，1993 年．

「金融システムと資本蓄積（Ⅱ）」『青山經濟論集』，45(4)，54-72，1994 年．

“Involuntary Unemployment and Multiplier: A Dynamic Microeconomic Foundation of Keynesian Economics,”『青山經濟論集』，46(1)，97-124，1994 年．

「日本的景気循環と経済成長」『青山經濟論集』，47(3)，31-51，1995 年．

「埋没費用，リスクシェアリング，及び経済成長」『三田学会雑誌』，88(2)，25-60，1995 年．

「ケインズ政策の現代的意義――金融政策を中心に」，*Economy Society Policy*，372，43-46，1996 年．

「内生的選好と経済成長――Veblen 的内生成長モデル」『国民経済雑誌』，175(1)，21-34，1997

年.
「独占的競争下の一般均衡投資理論」『フィナンシャル・レビュー』, 42, 4-16, 1997 年.
「経済成長理論と日本の経済成長」東京大学社会科学研究所［編］『20 世紀システム 2――経済成長 I 基軸』, 東京大学出版会, 35-69, 1998 年.
"Comments on 'The Anatomy of Sovereign Debt Crises: Lessons from the American State Defaults of the 1840s' by R. Sylla and J. J. Wallis," *Japan and the World Economy*, 10, 295-298, 1998.
「景気循環・経済成長と不確実性」, *Economy Society Policy*, 322, 18-21, 1999 年.
「合理的労使交渉と有効需要管理政策」（宇南山卓・斉藤孝と共著）『社会科学研究』, 51(2), 87-114, 2000 年.
「金融の国際化と外国為替投機――短期資本移動と金融危機」『社会科学研究』, 52(2), 169-178, 2000 年.
「「バランスシート調整」とモラルハザード」吉川洋・通商産業研究所編集委員会［編］『マクロ経済政策の課題と争点』, 東洋経済新報社, 215-226, 2000 年.
「失業のマクロ経済学入門」加瀬和俊・田端博邦［編］『失業問題の政治と経済』, 日本経済評論社, 237-249, 2000 年.
「銀行に監視能力は存在したか――過剰債務問題の観点から」宇沢弘文・花崎正晴［編］『金融システムの経済学――社会的共通資本の視点から』, 東京大学出版会, 113-127, 2000 年.
「90 年代の日本経済とマクロ経済学」（松村敏弘・三井清・山崎福寿と共著）『社会科学研究』, 52(4), 1-2, 2001 年.
「名目賃金交渉とリスクシェアリング仮説」（宇南山卓・玉井義浩と共著）『社会科学研究』, 52(4), 119-131, 2001 年.
「開発経済における人的資本と社会的セイフティーネットの役割」『フィナンシャル・レビュー』, 54, 34-41, 2001 年.
"Financial Globalization and Foreign Exchange Speculation," Sung-Jo Park and Seigo Hirowatari (eds.), *Strategies Towards Globalization: European and Japanese Perspectives*, Institute for Asian Studies, Berlin Free University, 297-307, 2002.
「市場規律与有効需要的管理政策」戴曉芙・胡令遠［編］『日本式経済・政治・社会体系――21 世紀的課題与展望』, 上海財経大学出版社, 91-109, 2002 年.
「クラブ財としての公的金融と「民営化」問題――日本政策投資銀行をモデルとして」『社会科学研究』, 57(2), 141-159, 2006 年.
「公的部門の「民営化」を考える」『世界』, 753, 岩波書店, 252-265, 2006 年.
「乗数理論のミクロ的基礎について」『社会科学研究』, 57(5·6), 11-23, 2007 年.
"The Dynamically Extended Keynesian Cross and the Welfare-Improving Fiscal Policy," *Economics Letters*, 96(1), 23-29, 2007.

「官庁景気動向判断の政治経済学」『社会科学研究』, 59(1), 171-194, 2007 年.

「「金融立国論」批判――日本経済の真の宿痾は何か」『世界』, 776, 岩波書店, 106-119, 2008 年.

「乗数理論およびインフレ理論のミクロ的基礎」大瀧雅之［編］『平成長期不況――政治経済学的アプローチ』, 57-88, 2008 年.

"A Welfare Economics Foundation of the Full-Employment Policy," *Economics Letters*, 102(1), 1-3, 2009.

「貨幣経済における独占的競争の動学的役割」（玉井義浩と共著）『社会科学研究』, 61(1), 101-110, 2009 年.

「貨幣, 公債および財政赤字――マクロ・ミクロ理論の接点で」『書斎の窓』, 589, 43-47, 2009 年.

「デフレは起きていない――現代日本の作られた悪夢」『世界』, 810, 岩波書店, 37-45, 2010 年.

「書評『経済学の理論と発展』」（根岸隆著）『社会科学研究』, 62(1), 219-226, 2011 年.

「本当に「失われた」ものは何か？失われた 10 年と「構造改革」を改めて問う」『世界』, 814, 岩波書店, 138-146, 2011 年.

「書評 Keynes: The Return of the Master」（Robert Skidelsky 著）『社会科学研究』, 62(2), 147-154, 2011 年.

「震災後 10 年のマクロ経済政策の方針」伊藤滋・奥野正寛・大西隆・花崎正晴［編］『東日本大震災復興への提言――持続可能な経済社会の構築』, 東京大学出版会, 133-138, 2011 年.

「社会の未来を考える（第 2 回 その 2）グローバリゼイションとはレーガノミクスの別の顔」『日経研月報』, 397, 24-36, 2011 年.

「サステイナビリティー, 内生的社会的割引率, 及び比例的炭素税」『社会科学研究』, 63(1), 3-9, 2011 年.

"Fundamentals of the Theory of Money and Employment," 『社会科学研究』, 63(1), 125-130, 2011 年.

"A Pure Theory of Aggregate Price Determination," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 1, 122-128, 2011.

"On the Dynamic Role of Monopolistic Competition in the Monetary Economy," (coauthored with Yoshihiro Tamai) *Theoretical Economics Letters*, Vol. 1, 114-117, 2011.

「一度きりの事象に確率は振れるか――保険のメカニズムから考える」『人環フォーラム』, 30, 京都大学大学院人間・環境学研究科, 14-15, 2012 年.

"The Role of Money: Credible Asset or Numeraire?" *Theoretical Economics Letters*, Vol. 2, 80-182, 2012.

"A Keynesian Model of a Small Open Economy under a Flexible Exchange Rate," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 2, 278-282, 2012.

"A Keynesian Endogenous Growth Theory with a Rigorous Microeconomic Foundation," *Theoretical*

Economics Letters, Vol. 2, 365-368, 2012.
"A Microeconomics Foundation for Optimum Currency Area: The Case for Perfect Capital Mobility and Immobile Labor Force," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 2, 395-399, 2012.
"A Macroeconomic Consequence of Foreign Direct Investment: The Welfare Economics of Industrial Hollowing," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 2, 412-417, 2012.
"A Study on Lucas' "Expectations and the Neutrality of Money"," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 2, 438-440, 2012.
"A Microeconomic Foundation for the Phillips Curve under Complete Markets without any Price Stickiness: A Keynesian View," (coauthored with Yoshihiro Tamai) *Theoretical Economics Letters*, Vol. 2, 482-486, 2012.
"The Aggregation Problem in the Employment Theory: The Representative Individual Model or Individual Employees Model?" *Theoretical Economics Letters*, Vol. 2, 530-533, 2012.
"The Stability of a Regionally Fixed Exchange Rate System: Can Euro be Sustained by Austere Fiscal Discipline?" *Journal of Business and Economics*, Vol. 3, 249-254, 2012.
「貨幣と国債の経済学」『科学』, 549-556, 2012 年.
「自著を語る :『平成不況の本質――雇用と金融から考える』」『学際』, Vol. 24, 104-110, 2013 年.
「金融政策の限界と新しい有効需要管理政策」『金融財政事情』, 27-31, 2013 年.
「理論経済学における「善」と「正義」――個人と社会の相互作用」『社会科学研究』, 64(2), 73-87, 2013 年.
「ベイルアウトは経済厚生にいかなる影響を及ぼすか？――ヨーロピアン・コールオプションを例として」『社会科学研究』, 64(3), 5-12, 2013 年.
「時代遅れで危険な「アベノミクス」経済政策」『前衛』, 97-108, 2013 年.
"Endogenous Social Discount Rate, Proportional Carbon Tax, and Sustainability: Do We Have the Right to Discount Future Generations' Utility?" *Environmental Systems Research*, Vol. 2, 1-8, 2013.
"How a Key Currency Functions as an International Liquidity Provision and Insurance System," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 3, 43-47, 2013.
"The Evaluation of Dexterity and a Theory of the Growth of a Firm," *Modern Economy*, Vol. 4, 226-229, 2013.
"Can Bailout Improve the Economic Welfare? A Structural Derivation of the Option Price," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 3, 105-107, 2013.
"On the Endogenous Sustainability of Economic Growth: Why Is the Scale of Government Enlarged?" *Theoretical Economics Letters*, Vol. 3, 159-163, 2013.
"A Study on Lucas' "Expectations and the Neutrality of Money"--II," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 3, 168-170, 2013.

"Inseparability of Transaction Medium and Store of Value in the Role of Money," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 3, 226-228, 2013.

"Monetary Economic Growth Theory under Perfect and Monopolistic Competition," (coauthored with Masaoki Tamura) *Theoretical Economics Letters*, Vol. 3, 216-219, 2013.

"Emission Trading or Proportional Carbon Tax: A Quest for More Efficacious Emission Control," *Environmental Systems Research*, Vol. 2, 1-6, 2013.

"Income Disparity, Uneven Economic Opportunities, and Verifiability," *Advances in Social Sciences Research Journal*, Vol. 1, 44-49, 2014.

"Efficacy in Education and Intergenerational Wellbeing," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 4, 183-189, 2014.

「「なぜ」という問いが足りないメディア——事実追認や既得権益擁護から脱却せよ」『Journalism』，朝日新聞社，71-80, 2014 年.

「経営権と企業成長のコンフリクト——企業成長の源泉としての人的資本の再評価」（柳沼寿と共著），堀内昭義・花崎正晴・中村純一［編］『日本経済——変革期の金融と企業行動』，東京大学出版会，127-149，2014 年.

「効果的な二酸化炭素排出制御——排出権取引の実際と理論」（國則守生と共著）間宮陽介・堀内行蔵・内山勝久［編］『日本経済——社会的共通資本と持続的発展』第 7 章，東京大学出版会，235-257，2014 年.

「宇沢弘文先生とケインズ経済学」『現代思想』，青土社，62-75，2015 年.

「The General Theory of Employment, Interest and Money を読む」『社会科学研究』，66(2)，3-40，2015 年.

「Activities 1922-1929: The Return to Gold and Industrial Policy を読む」『社会科学研究』，66(2)，41-62，2015 年.

"On the Limit of Human Cognition: Is Artisanship always Dominated by Profit Motive?" *International Journal of Humanities Social Sciences and Education*, Vol. 2(6), 49-57, 2015.

"Local Altruism as an Environmental Ethic in CO2 Emissions Control," *Atmospheric and Climate Sciences*, Vol. 5, 433-440, 2015.

"Public Debt as a Burden on the Future Generation: A Keynesian Approach," *Theoretical Economics Letters*, Vol. 5, 651-658, 2015.

"Ramsey's Belief and the Plausibility of Keynesian Economics," *Theoretical Economic Letters*, Vol. 5, 725-729, 2015.

「②消費の生涯効用関数が相似拡大的である場合の Otaki（2007）モデルの性質」『社会科学研究』，66(2)，243-247，2015 年.

「Capital in the Twenty-First Century を読む——ディシプリンと論理の重要性」『生活経済政策』，21，7-12，2015 年.

「経済政策のガバナンスとは——構造改革は事態を悪化させた」大沢真理・佐藤岩夫［編］

『ガバナンスを問い直すⅡ――市場・社会の変容と改革政治』，東京大学出版会，2016年.

「フランク・ラムゼー覚書」『社会科学研究』，67(1)，85-102，2016年.

"Modified Ramsey's Rule, Optimal Carbon Tax and Economic Growth," (coauthored with Morio Kuninori) *Atmospheric Climate Sciences*, Vol. 6, 224-235, 2016.

"Properties of the Social Discount Rate and Negative Intertemporal Externality in the Utility or Production Function," *Low Carbon Economy*, Vol. 7, 47-53, 2016.

"Modified Ramsey Rule and Optimal Carbon Price," *Atmospheric Climate Sciences*, Vol. 6, 267-272, 2016.

"Artisanship, Meritocracy, and Apathy," *International Journal of Humanities, Social Sciences, and Education*, 3-5, 78-89, 2016.

"A Theoretical Inquiry of the Offset Mechanism in Mitigating Global Warming: Economic Welfare Implications of the Clean Development Mechanism Investment," (coauthored with Morio Kuninori) *Environment and Natural Resources Research*, 7(1), 76-81, 2017.

論説

「金融の国際化と為替レートの決定メカニズムの変化」『商経論叢』，23(2)，108-76，1988年.

「提言 マクロ経済政策としての公共事業（特集 平成10年度建設省関係予算特集）」『建設月報』，51(4)，22-23，1998年.

「マクロ経済学 国民経済分析のイロハのイ」『週刊ダイヤモンド』，86(17)，40-41，1998年.

その他

「高橋さんを偲んで」『青山經濟論集』，45(3)，17-19，1993年.

「我が心は石にあらず」『経済セミナー』，495，14-17，1996年.

「公共経済学の最近の研究動向：松村敏弘氏の業績について」（河合正弘と共著）『社会科学研究』，50(5)，111-124，1999年.

「始まりを成さんがために人は作られた」University Press，28(6)，13-18，1999年.

「編集するにあたって（特集 90年代の日本経済とマクロ経済学）」『社会科学研究』，51(2)，1-2，2000年.

「序文（特集 経済統計）」（松田芳郎・美添泰人・舟岡史雄・清水誠と共著）『社会科学研究』，53(5)，1-3，2002年.

「新しいマクロ経済理論の構築を目指して」『社会科学研究』，63(1)，1-1，2011年.

「序文（特集 社会科学における「善」と「正義」）」（宇野重規・加藤晋と共著）『社会科学研究』，64(2)，1-6，2013年.

「はじめに（特集 新しい金融経済学）」（随清遠と共著）『社会科学研究』，64(3)，1-3，2013年.

「徹底討論 日本経済をどうする！」（大瀧雅之・小池晃）『経済』，211，14-23，2013 年.
「ここがおかしい！経済報道［インタビュー］」『放送レポート』，247，2-6，2014 年.
「序文（特集 ケインズとその時代を読む）」『社会科学研究』，66(2)，1-2，2015 年.
「序文（特集 ケインズとその時代を読むⅡ）」『社会科学研究』，67(1)，1-3，2016 年.

※『経済セミナー』495号（1996年4月号），日本評論社，14−17頁を，著作権者および株式会社日本評論社の許諾を得て転載。

●特集／経済学と出会う

我が心は石にあらず

私の青春奮闘記

大瀧雅之
Otaki Masayuki

20年前高校生だった私が経済学部進学を決めたのには、それほど積極的な動機があったわけではない。得意だった数学を社会科学という得体の知れない課題に適応できることに漠然と魅力を感じただけのことであった。思えばあまりに幼稚であったが、緻密で無機的な数的ロジックで複雑怪奇な人間や社会の行動がどのように描写できるのかは、経済学の「け」の字も知らない当時の私には、不思議でならなかった。
また法律のしかつめらしい日本語を相手にするのは閉口だったし、文学や歴史という些（いささ）か気障（きざ）で辛気くさい（当時の私には少なくともそう思えた）ジャンルに踏み込むには、あまりにバンカラな高校生であった。理科系進学も考えなかったわけではなかったが、重力や電磁気力がなぜ発生するのかという問いにばかりこだわっていて、表面的な公式の暗記や計算が鬱陶しかった。したがって、多くの学生と同じように、私の経済学部志望の動機もそれほどはっきりしていたわけではない。林周二先生の中公新書『数学再入門』の線形計画法には興味を持ち、これが経済で使う数学の一部であると知って、多少の興奮を覚えたぐらいのものである。要するに、私は何も知らない田舎の平凡な高校生だったのである。

不安と焦燥と……

1年の浪人を経て入った大学の教養課程は、正直に言って退屈なものであった。講義で楽しかったのは、あらかじめ基礎知識があった解析と高校時代から興味があった15年戦争当時の日本史だけであった。浪人という不安定な身分から解放された反動もあったのだろうが、講義には身が入らず、周りの同級生からは「落ちこぼれ」と呼ばれ、酒と恋愛と読書だけに現（うつつ）をぬかす毎日であった。

しかしいま考えても、この時期の読書は有用であった。といっても経済学の専門書を読んでいたわけではない。漱石・龍之介・鷗外、そして高橋和巳を毎日のように貪り読んだ。龍之介からは懐疑することの大切さを学び、漱石・鷗外や高橋和巳からは（青臭く気恥ずかしい限りだが）「知識人」としての矜持やその社会的役割の難しさを学んだ気がする。幼く混沌としたものではあったが、大学生としてのプライドと「知識人」としてなにがしかの社会的役割を進んで引き受けたいという渇望があったことを覚えている。その裏付けとなるものが一体何か、またそれを自らが築き上げることができるのか、青春のただ中にいる私には、それがまるでわからなかった。この不安と焦燥は30代半ばとなり自分なりの人生のペースを摑むまで、陰に陽に私を強く悩ませ続け、ときにはすべてを失いかねないほどの危機に陥ったことさえある。私の青春は、決して暗いものではなかったが、私とい

う小さな存在にはときに手に余るほど起伏に富んだものであった。

端的に言えば、私に経済学を本格的に始める決心をさせたのは、サミュエルソンの色刷りの部厚い教科書ではない。それは電車の中で見栄を張って広げたことさえあれ、決して胸を打つ内容ではなかった。高橋和巳のうんざりするほどの硬いタッチで書かれた『我が心は石にあらず』や『憂鬱なる党派』こそが、あの頃の私の魂であった。自らの「良心」に照らして恥じない一貫した生き方の大切さ、それを失ったときの挫折の怖さは、この時期の私の内面に強く焼き付けられていた。組織の論理に巻き込まれない独立した自我を形成するには、そして現在の環境に最も適応した進路は何かと考えれば、必然的に研究者を目指さざるを得ないというのが、教養課程も終わろうとしたときの偽らざる心境であった。つまり経済学そのものの魅力ではなく、自らの生き方の都合上、研究者を目指し始めたわけである。当時の私にとっての経済学は、研究者になるために最も手近にあった手段だったのかもしれない。そしてそのために、宇沢弘文先生の演習を希望することとなった。

眼前に屹立する巨峰

南アルプス・スーパー林道の描写で始まる先生の『近代経済学の再検討』は、登山に熱中していた私が、最初に身を入れて読んだ経済学の入門書である。内容は今読むと些か味付けが濃いとも感じるが、社会をこのように批判的に捉えることが経済学でできるのかと愁眉を開いたことは事実である。そしてこの本が、私の現在に至るまでの経済学に対するスタンスを形作ったことは否めない。今にして思えば汗顔の至りだが、この一冊と高橋和巳だけを胸に私は先生の研究室での面接へと向かった。

２年次の専門科目の成績が悪い私は、大変緊張していた。先生に志望の動機を聞かれて、「立派なインテリになりたくて、このゼミを志望しました」と答えたものである。先生が「そのインテリというのは研究者になりたいということですか」と仰ると、私は「できれば……」としどろもどろになって答えたことを良く覚えている。教師の端くれとなった今からすれば微笑ましい限りであるが、読者諸賢は笑うこと勿かれ。「落ちこぼれ」の一学部生にとって世界的な学者でいらっしゃる先生は、眼前に屹立する巨峰なのである。

しかし漸くにして潜り込めたゼミは、とてもつらかった。ゼミではいきなりロイド・メッツラーの論文集を、サブゼミではスティグリッツ・宇沢編の経済成長論の論文集を読まされた。４年次にはルーカスの有名な貨幣の中立性に関する論文をわけのわからないまま繰り返し読んだ。変分法、ダイナミック・プログラミングや確率論の基礎知識が全くなかったために、大変苦しく恥ずかしい思いの毎日だった。しかし教わっていないことがわからないことの言い訳になるとは、一度も考えたことはなかった。わからないことは不勉強が原因であり、それは自らが責めを負うべきものであるという大学生としての自覚だけはしっかりあったつもりである。

ゼミでの先生はプロ棋士養成の指導に似て、手ずから教示されることはほとんどなかったと記憶する。学生同士の切磋琢磨を重視し、先生はときにきわめて厳しく辛辣なコメントだけを残されるというのが、ゼミの指導だったと思う。こういった職人気質の教育は、現在のマスプロ化されつつある学部・大学院教育には馴染まないかもしれない。しかし生涯を経済学に捧げようとする学生には、完成するまで大変な時間と努力が必要とされるが、最も適した教育であると、今でも私は信じて疑わない。上滑りに覚えるのではなく、試行錯誤を繰り返しながら経済学のロジックを基礎からの積み上げで丹念に習得する。迂遠に感じられるかもしれないが、このことは、理論のエッセンスの抽出法を体得させることを通じて、究極的には論文の読破力と速読力を高めることにつながる。また徹底した経済学的論理の習得は、同時に、トゥールとなる数学的手法のマスターも容易ならしめる。論

文のエッセンスが把握できれば、そこに書かれている数式からも、経済学的含意を汲み取れるようになるからである。事実、このときやっとの思いで獲得した貿易理論や成長理論の考え方は、理論経済学で論文を書くようになった現在でも、十分に生かされている。

さて、学部ゼミの雰囲気に慣れたのもつかの間、俊秀の集う大学院に進学した。上級生には清瀧信宏さん（現ミネソタ大学）や松山公紀さん（現ノースウェスタン大学）をはじめとした優秀な先輩がきらびやかに居並び、私は途方に暮れざるを得なかった。この5年間は、今思い出しても辛いの一語に尽きる。教養課程時代と同様に、またしても「落ちこぼれ」になってしまったのである。この80年代前半という時期は、ちょうどマクロ経済学の転換期であり、素朴なケインズ理論から現在のミクロ的基礎を重視するマクロ経済学への脱皮の時期であった。福田慎一さん（現一橋大学）が著書に書かれていたとおり、当時マクロ経済学を専攻する院生は、よほどの変わり者と見なされていた。しかし福田さんとは違い、とくにミクロの基礎的学力に不足する私は、なけなしの基礎知識に縋り付いて、旧来のケインズ経済学的なモデルを毀しては作り、作っては毀しを繰り返さざるを得なかった。これでは、「落ちこぼれ」と認定されても致し方ない。

焦燥に苛まれる私を励まし前進させてくれたのは、堀内昭義先生と、柳沼寿さん、堀内行蔵さん（ともに現法政大学）をはじめとする日本開発銀行設備投資研究所の方々である。開発銀行には先輩の山崎福寿さん（現上智大学）のお世話で３年間嘱託として採用していただいた。学生としては分不相応な待遇を頂いたと同時に、そこで学んだ投資理論は、私なりに制御理論や確率論を系統的に理解するのにきわめて有用であった。大学院の読書会で嗤われながら読んだルーエンバーガーの『関数解析による最適制御理論』の意味が、朧気ながらもわかりかけてきたのも、大学院も終わりに近づき就職への不安が募りだした５年生（ドクター３年）の春の設備投資研究所でのことであった。

理論経済学を専攻する上でのテクニックを磨いたのが開発銀行であるとするなら、堀内昭義先生には、経済学者として社会を観察する視点を学ばせていただいた。先生は外面こそ大変温厚な紳士でいらっしゃるが、内面は厳しく公平な目をお持ちのリベラリストであると、私は思う。先生は日本の資本主義を懐疑的に眺めておられるが、決して感情に流されることがない。論理的な社会への批判とはこういうものかと、野人の私には感心させられること幾たびかであった。生来の怠け者で実証分析を不得手とする私が、先生の巧みな誘導で、共同論文を書く機会を与えていただいたことは、大変な光栄であった。だが、その完成稿は結局ほとんど先生の手になるものであり、論文を仕上げる手際の良さと完成した論文の鋭い批判は、逆に研究者としての自己の未熟さを知らしめるに余りあった。しかし公私ともに率直にそして厳に公正にという堀内先生の姿勢は、学部学生時代の信条であった「良心」の大切さを思い起こさせ、今でも私の糧となっている。さらに教えを通じて、広い視野と深い教養に裏付けられた社会や文明への懐疑、これこそが目指すべき経済学であると示唆していただけた。このことは、未だに感謝に堪えない次第である。そして「諦めることはいつでもできる。だから最後まで粘らなくてはならないよ」という先生の一言は、現在の非才な私の研究を支えている。

一歩一歩積み上げるだけ

さて、これといった業績もない私が幸運にも神奈川大学に就職できたのは、偏に間宮陽介先生（現京都大学）の抜擢によるものである。公募で入った私は、先生とは一面識もなかった。だが先生の「君は自分の頭で考えていると思った」という評価は、私には何者にも代え難いほど嬉しかった。しかし空虚な自信は自ずと崩壊せざるを得ない。虚栄で自己を支えることは決してできないのである。はじめて社会へ出たこ

との衝撃によって、それまでの私の幼稚でわがままな生活は清算を迫られていた。それは、以前に体験した大学浪人などとは比較にならない大きな陥穽だった。その過程で私はいくつかのほろ苦い思い出を残さざるを得なかったが、同時に、肉親や人生の先達の本当の暖かさを知ることができた。これらの方々に対する畏敬と感謝の念は、今も変わることがない。

「学者として一家を成せ」、「別に君は招かれて此処にきたわけではない。着実に義務を果たせ」。これが間宮先生の私への口癖だった。先輩としての温かい情に裏打ちされた厳しさが、人間の冷ややかな一面を初めて見せつけられていた私には、心に泌み入るようであった。当時先生とよく飲んだ（そして飲んではよく泣いた）六角橋の赤提灯は今でも懐かしく覚えている。『無いものは無い。誰に何を云われても、無ければ一歩一歩積み上げるだけだ』。間宮先生の励ましによってそんな決意が自分なりについたのは、就職してすでに丸２年もたった頃だったと思う。

当時も相変わらず、ケインズ経済学の応用で金融や国際金融のマクロモデルを作っていた。それでもこの時分には、自分のモデル・ビルディングの技量が上昇しつつあることが、手に取るようにわかるようになり、楽しい日々だった。現在の主たる研究テーマである埋没費用投資と履歴現象の輪郭が、かなりはっきりしてきたのは、勤務をはじめて２年目の秋だった。まだミクロ的基礎を持つ動学理論に手が届くには距離があったが、それもそう遠い処でないことは自覚できた。初めて学会誌に論文の掲載が決まったのもこの頃である。

別段変わったことをしたわけでもないのに、自分なりに研究が進展しだしたのは、やはり内面に横たわる虚栄や高慢、そしてその裏返しとしての蔑まれることへの恐怖に率直に向き合えるようになったからだと思う。『研究にしろ人生にしろ一時蔑まれても、挫けることなくそこから学ぶことがあれば、それは一つの進歩である』と素直に考えることができるようになった。これは、私の青春の最大の収穫である。

なぜマクロ経済学にこだわるのか

最後にこれから経済学を学ぼうとする人達のために、なぜ私がマクロ経済学のそれも理論にこだわり続けているかを話しておこう。学部では IS-LM 分析を中心としたケインズ経済学を学ぶであろう。しかしそれは日干しの、ある意味では、安物の偏差値教育が映し出したケインズである。わからなくともよいから、原著『雇用・利子及び貨幣に関する一般理論』を一度繙（ひもと）いてみてほしい。就職当初、縋る思いで読んだ間宮先生の『モラルサイエンスとしての経済学』の謂う「ケインズは経済の表層の下には末広がりに広がる深層部があり、後者は前者のありようをさまざまな形で特徴付け限定していることを認識していた」ことを、感得できるはずである。

現在の先端的なマクロ経済学に課された一つの大きな課題は、異なる国民経済を支えるこの多様な深層部を論理的にそして冷静に剔抉（てっけつ）することにある。これによってはじめて、偏りの少ない目で自国・他国の経済を捉えられる。異文化との接触が異様に頻繁となった今日（国際化として歓迎する向きもあるが、これは無邪気な拝外主義である。レヴィ＝ストロースの云うように共存のためには適当な距離が不可欠である。それほどに人の自己愛は強いものである）、相互理解を深め高まる緊張を少しでも解きほぐすためには、経済全体を注意深く鳥瞰する経済学すなわちマクロ経済学の責務が大きいと、私は信じている。

社会科学の基本はルオーの深い青にも似て、自己を含めた人間への峻厳な優しさにあることを覚えておいてほしい。経済学は本来、かくの如く磨かれ落ち着いた暖かさの上に一つ一つを論理的に誠実に積み上げる学問である。そして驕慢こそは、そうした真摯な知的営為の真の敵なのである。

（おおたき・まさゆき／青山学院大学経済学部）